

こども環境学研究

「大会テーマ」

こども環境学会2025大会（高知）

インクルーシブなこども環境

— こどもの自由は土佐の山間より —

2025年大会（高知）

【期日】 2025年5月30日（金）～6月1日（日）

【会場】 永国寺キャンパス（高知工科大学・高知県立大学）

（〒780-8515 高知県高知市永国寺町2番22号）

- 主催 公益社団法人こども環境学会
- 運営 こども環境学会 2025年大会（高知）大会委員会・大会実行委員会
- 共催 高知県、高知市、高知大学、高知工科大学
- 後援 高知県教育委員会、高知市教育委員会、公益社団法人日本建築家協会四国支部、一般社団法人日本建築学会 四国支部、一般社団法人日本福祉のまちづくり学会、こども家庭庁、国土交通省、文部科学省、環境省、日本学術会議、一般社団法人防災学術連携体、国立研究開発法人科学技術振興機構、公益財団法人日本ユニセフ協会、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟、一般社団法人日本建築学会、公益社団法人日本都市計画学会、公益社団法人日本造園学会、一般社団法人日本環境教育学会、一般社団法人日本発達心理学会、一般社団法人日本保育学会、一般社団法人日本体育・スポーツ・健康学会、日本子ども社会学会、人間・環境学会、日本安全教育学会、日本感性工学会、公益社団法人日本小児保健協会、公益社団法人日本建築家協会、一般社団法人全国建設室内工事業協会、一般社団法人都市計画コンサルタント協会、一般社団法人日本公園施設業協会、一般社団法人日本公園緑地協会、一般財団法人公園財団、一般社団法人日本造園建設業協会、公益財団法人都市緑化機構、IPA 日本支部、特定非営利活動法人チャイルドライン支援センター、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、一般財団法人日本造園修景協会

Vol.21, No.1 (C.N.59) May 2025

CONTENTS

 大会挨拶	3
開催にあたって こども環境学会 会長 木下 勇.....	3
ご挨拶 高知県知事 濱田 省司	4
ご挨拶 高知市長 桑名 龍吾	5
ご挨拶 高知大学学長 受田 浩之.....	6
ご挨拶 高知工科大学学長 蝶野 成臣	7
大会委員長挨拶 こども環境学会 代表理事 仙田 満	8
インクルーシブなこども環境 2025年大会（高知）実行委員長 高橋 秀俊.....	9
エクスカージョン	10
タイムスケジュール	12
交通案内・会場案内	13
 大会プログラム	14
メイン・パネルディスカッション① 土佐のキラキラコンテンツを育てたこども環境	15
ランチタイム・セミナー 人生はよろこばせごっこ～やなせたかしの生き方と作品世界より～	17
メイン・パネルディスカッション② 「こどもまんなか社会」におけるインクルーシブな保育とこども環境	18
分科会Ⅰ 多様な子どもたちの育ち・学びを支える音・光環境 ～センサリーフレンドリーな環境づくり～	20
分科会Ⅱ 子どもが主役のインクルーシブなまちづくり ～「とさつ子タウン」から「こうちこどもファンド」へ～.....	21
分科会Ⅲ こどもと取り組む防災とまちづくり	22
分科会Ⅳ デジタル社会を生きるこどもたちとどう向き合うか	23
ワークショップ 1 落ち着ける居場所をつくろう	24
ワークショップ 2 絵の具やインクを使わない「ねんど版画」	25
 2024年度（第20回）こども環境学会賞の発表	26
学会賞受賞者表彰式および記念講演会	27
こども環境学会賞の受賞者紹介	28
 ポスターセッション・指定口頭発表	39
協賛企業広告	111
会員の現況等について	118
実行委員会・大会実行委員会リスト	119



開催にあたって

こども環境学会2025年大会（高知）

こども環境学会会長、千葉大学名誉教授
木下 勇

こども環境学会 2025 年大会（高知）開催にあたり、ご挨拶申し上げます。
四国では初めての開催であり、高知市で開催できることは、たいへん喜ばしいことです。四国では学会員が少ない中、高橋実行委員長はじめ実行委員会の皆様の準備にかけた時間と労に、感謝とねぎらいの言葉をまずはおおくりしたいと思います。

大会のテーマは「インクルーシブなこども環境～子どもの自由は土佐の山間から」であります。最近、インクルーシブ・デザインの遊具を置いたインクルーシブ公園などインクルーシブという言葉がよく聞かれるようになりました。ただ、インクルーシブ遊具を置けば、インクルーシブ公園かと、誤解された広がり方も気になるところです。

インクルーシブ (inclusive) の反対語はエクスクルーシブ (exclusive)、排他的ですので、インクルーシブはその反対の包括的、あらゆる人を受け入れるという意味です。障害のあるなし、性差、年齢差などで区別せずに、あらゆる人が受け入れられるための工夫をしていくことが、より大事になっています。

公園でも、車椅子の子どもでもブランコや滑り台などで遊べる遊具を設けることも、そんなデザインの考え方ですが、それだけではなく、健常児といわれる子どもたちが障害をかかえる子どもたちと一緒に遊ぶこともインクルーシブな公園となるのです。

本学会の設立総会にて基調講演をしたロビン・ムーア教授とともに MIG というランドスケープデザインの事務所を設立したスーザン・ゴルツマン、ダニエル・アィアコファノら 3 人の代表は Play for All という、障害のある子どもと一緒に遊ぶ活動をも NPO として展開していました（故スーザン・ゴルツマンが代表として推進）。MIG はその経験から公園などのデザインガイドラインを作成し（『子どものための遊び環境：計画・デザイン・運営管理のための全ガイドライン』（吉田・中瀬訳 1995, 鹿島出版会）、合衆国全体へもその整備を働きかけました。そして彼らは後にインクルーシブ・シティという街全体をインクルーシブな環境にするガイドラインを作成しました。

これまでバリアフリーとかユニバーサル・デザインと言われていた考え方は主にハードな環境の改善が主でした（それだけ物理的環境の問題が大きかったのだ）。インクルーシブの考え方は、ハードのみではなく、むしろ人の関係が大事だということは故スーザン・ゴルツマンが話していたことです。そのために NPO などのソフトの活動が大事だと。

高知といえば土佐、土佐といえば坂本龍馬がすぐ私の頭に浮かびます。坂本龍馬もそういう異なる人や組織をつなぐことに奔走し、また武力に頼る改革ではなく、海援隊という新たな組織をつくり、新しい世界への変革を意図しました。

そのお膝元の高知、四国から、だれをも取り残さない、誰にも開かれて、子どもたちが安心して自由に生きられる世界をつくる気運が本大会を契機に広がることを祈念しています。

千葉大学名誉教授、工学博士
東京工業大学で建築を学び、1984年に博士号学位取得。世田谷区にて冒険遊び場づくりの支援とともに三世代遊び場マップづくりや子ども参画のまちづくりを進める。（社）農村生活総合研究センターを経て1992年より千葉大学園芸学部で教鞭をとり、2020年3月に定年退職、同年4月より大妻女子大学社会情報学部教授、2025年3月定年退職、4月より同大学人間生活文化研究所特別研究員。日本ユニセフ協会子どもにやさしいまちづくり事業委員会委員長など歴任。前こども環境学会副会長。著書に『ワークショップ～住民主体のまちづくりへの方法論』、『遊びと街のエコロジー』、『三世代が遊び場図鑑』、『アイデンティティと持続可能性』、『子どもまちづくり型録』など。



ご挨拶

こども環境学会2025年大会（高知）

高知県知事 濱田 省司

- ・昭和38年1月23日生まれ
- ・最終学歴：昭和60年3月
東京大学法学部卒業
- ・主な職歴：
昭和60年4月自治省（現総務省）
入省／平成26年7月総務省大臣
官房参事官（秘書課担当）／平成
27年7月内閣府大臣官房審議官
（経済社会システム担当）／平成
29年7月大阪府副知事／令和元
年7月総務省大臣官房総括審議
官（マイナンバー情報連携、政
策企画）／令和元年12月高知県
知事（1期目）／令和5年12月
高知県知事（2期目）
- ・趣味：健康スイム／歌番組の視聴
- ・好きな土佐弁：まかしちよき！

こども環境学会2025年大会がこの高知県で盛大に開催されますことを、心からお喜び申し上げます。

皆さま、ようこそ高知へお越しくださいました。心から歓迎申し上げます。

公益社団法人こども環境学会の皆さまにおかれましては、学問領域を超えて研究者や実践者が集い、こどもを取り巻く環境について共に研究し、提言をし、実践されることでよりよい成育環境づくりに貢献されていることに、心から敬意を表します。

貴学会の設立趣旨にあるように、こどもは自分たちが育つ環境を選ぶことができません。未来を担うこどもたちが心身ともに健やかに成長していくためには、社会全体でこどもたちのことを一番に考えて行動していくことが必要です。

令和5年4月に施行された「こども基本法」は、こどもや若者に関する様々な取組を講じるに当たり、こども施策を社会全体で総合的かつ強力に実施していく包括的な法律です。

この法律によって、全国で子育て支援はもちろんのこと、若者の就職支援等も含め、だれもが幸福な生活を送ることができる社会を目指すための取組が進められています。

本県では、これまでもすべてのこどもが心豊かに成長することができる社会を実現することを目指して、「高知県子ども条例」を制定するなど、こどものより良い環境づくりに取り組んでまいりました。しかし、貧困、児童虐待、いじめ、不登校等のさまざまな問題は複合的かつ複雑化しており、すべてのこどもが幸せな環境で暮らしているとは言い難い状況です。

こうしたことから、子ども・子育て支援法や子ども・若者育成支援推進法に基づく計画をはじめ、こどもの貧困やひとり親家庭への支援など、これまで個別に策定していた6つの県計画を一元化し、本県のこども施策の取組の方向性をお示す「高知県こども計画」を令和7年4月に策定いたしました。

次世代を担う大切なこどもが、自尊心や自己肯定感を育み、健やかに成長できることを強く願うとともに、本県の「こどもまんなか社会」の実現を目指して、こどもや若者ら当事者の意見を聞き、その声を大切にしながら施策を進めてまいります。

5月30日から3日間開催される本大会では「インクルーシブなこども環境—こどもの自由は土佐の山間より—」をテーマに高知県内外から様々な報告があると伺っております。参加者の皆さまの活発な討議が展開され、本大会が実り多き成果をあげられますことを心から期待しております。

高知県は太平洋や緑深い森林に囲まれた美しく自然豊かな場所です。そうした大自然は、多くの恵みをもたらしてくれており、新鮮な海山川の幸で彩られる郷土料理や自然が織りなす絶景など多くの魅力にあふれています。

また、現在、本県出身でアンパンマンの生みの親やなせたかしさんと妻の暢（のぶ）さんがモデルの連続テレビ小説「あんぱん」が放送されています。本県でもロケが行われ、放送開始にあわせて、物部川エリア観光博「ものべすと」や「どっぴり高知旅キャンペーン」を開催しています。

限られたお時間だとは思いますが、是非この機会に高知の自然・食・文化にも触れ、本県の魅力を感じていただきたく存じます。

結びにあたり、本大会のご成功と、お集まりの皆さまのご健勝とご活躍を祈念申し上げます。ご挨拶といたします。



ご挨拶

こども環境学会2025年大会（高知）

高知市長 桑名 龍吾

こども環境学会 2025 年大会（高知）が、四国で初めて、高知市で盛大に開催されますことを心からお喜び申し上げますとともに、高知市を代表して心から歓迎いたします。

近年、急激な少子高齢化・人口減少社会の進展による出生数の減少や地域コミュニティの衰退、多世代同居家庭の減少などを背景に、子育ての不安感や負担感、孤立感を感じるご家庭は少なくなく、こどもを取り巻く環境は多様化・複雑化しています。社会全体でこどもや子育て家庭を支える必要性が日に日に増している状況です。こどもたちが幸せになることは、その家庭だけでなく、周りの方々も笑顔にし、活力を与え、地域社会にもより良い効果をもたらします。

令和 5 年 4 月には「こども基本法」が施行され、すべてのこどもが将来にわたって幸せな生活ができる社会、いわゆる「こどもまんなか社会」を実現するために、国や地方自治体は当然のこと、社会全体で取り組むことが明確化されました。

公益社団法人こども環境学会におかれましては、学問領域を超えて研究者や実践者が集い、こどもを取り巻く環境について共に研究・提言・実践していく中で、こども達のためのよりよい成育環境づくりにご貢献されておられます。この活動は、このこどもまんなか社会の実現に大きく寄与するものであり、深く敬意を表します。

本市におきましても、平成 26 年に設置した「こども未来部」を中心に、本年 3 月、「希望あふれる未来に向けて みんなで支え育ちあう子ども・子育て支援のまちづくり」を理念に掲げた「第 3 期子ども・子育て支援事業計画」を策定し、地域社会全体でこどもと子育て家庭を支えるまちづくりに取り組んでいます。さらに今年度は、若者世代も含め総合的にこども施策に取り組むため、「こども計画」の策定に着手し、「こどもまんなか社会」の実現に向けた取組のさらなる充実を図ることとしています。

こうした中、本大会が、「インクルーシブなこども環境—こどもの自由は土佐の山間より—」をテーマに、この高知市で開催されます。

本市では長年、インクルーシブ保育の考えを取り入れながら、集団の中で育ちあう総合保育の形態で障がい児保育に取り組んできました。本大会では、このインクルーシブ保育をテーマにしたメイン・パネルディスカッションが予定されていますし、本市がこどもたちの「自分たちのまちを良くしたい」という思いを実現するため、平成 23 年から続けている「こうちこどもファンド」の取組に関するディスカッションもあると伺っています。

このようなつながりから、本大会での交流や活発な議論を通じた成果に、大いに期待を寄せているところです。

また高知県は、東西に非常に長い太平洋の海岸線と四国山脈に挟まれた、温暖で美しく豊かな自然に恵まれた土地です。幕末に活躍した坂本龍馬や自由民権運動の板垣退助、植物学者の牧野富太郎博士、「アンパンマン」の作者、やなせたかし先生のふるさとでもあります。大会の合間に、この高知の魅力と自由な風土を感じていただければ幸いです。

最後に、今大会の開催に向けてご尽力されました関係者の皆様方に厚くお礼申し上げますとともに、本大会のご成功とこども環境学会のますますのご発展を心からお祈り申し上げます。

出身：高知県高知市

【学 歴】

昭和 56 年国学院大学久我山高等学校卒業／昭和 60 年国学院大学法学部卒業

【職 歴】

昭和 60 年 JA 高知経済連（現 JA 高知県）入会／平成 8 年衆議院議員 秘書／平成 19 年高知県議会議員／令和元年第 98 代高知県議会議長／令和 2 年高知県議会新型コロナウイルス感染症対策調査特別委員会委員長／令和 5 年 11 月 30 日高知市長就任



ご挨拶

こども環境学会2025年大会（高知）

高知大学学長 受田 浩之

1960年北九州市生まれ。
九州大学（農学博士）。九州大学農学部助手、ドイツ国立バイオテクノロジー研究所（GBF）客員研究員、高知大学農学部教授、地域連携推進本部長、(旧地域連携推進センター) 現 次世代地域創造センター長、副学長、理事などを歴任し、2024年4月より学長就任。著書：新時代LX持続可能な地域の未来を切り拓く（南の風社 出版）

こども環境学会2025年大会（高知）が四国で初めて、ここ高知県において開催されますことを心よりお祝い申し上げます。本大会開催にあたりご尽力いただいた関係の皆様、全国各地からご参加くださった皆様に深く感謝申し上げます。

高知県は、少子高齢化や中山間問題など、我が国で近い将来深刻化していく先鋭的な課題を10年から15年先取りした「課題先進県」と言われています。特に、この先高い確率で発生するとされる南海トラフ地震では甚大な被害が想定されています。昨年8月8日には「南海トラフ地震臨時情報・巨大地震注意」が国から発出され、本年3月には約10年ぶりに新たな被害想定が公表されたところです。引き続き危機感を強くして防災活動、事前復興を進めていく必要があります。一方で、これらの困難な諸課題に直面しながらも、日本や世界におけるデジタル化やグローバル化の進展、社会・産業構造の急速な変化に対しても柔軟かつ適切に対応することが求められています。これらの課題の解決に取り組み、持続可能な社会の形成と発展を実現するためには、社会や時代のニーズに対応した教育を通じて、変化に対応できる有為な人材を育成することや、社会におけるイノベーション創出を支える基盤的・先端的な研究を推進することが必要です。そのために地域における高等教育機関が果たすべき役割は今後ますます重要になっていくと考えられます。

高知大学は高知県で唯一の国立総合大学として、1949年に発足し、以来常に地域とともに歩みつつ進化してまいりました。2003年に高知医科大学と統合し、2004年に国立大学法人となって以降、本学はこれまで以上に地域に根ざした大学となるべく、不断の改革を行ってきました。2015年に設置した地域協働学部では、地域をキャンパスとし、地域の方々との協働して地域の課題解決に当たることを学びの基本としており、全国の地域系学部の先駆けとなりました。2018年からは、高知という地域に軸足を置く「Super Regional University (SRU)」を理念に掲げ、「地域を支え、地域を変えることができる大学」を目指し、キラリと光る地域中核大学としての新たなモデルを構築すべく挑戦を続けています。お陰様で昨年2024年度には創立75周年の節目を迎えました。2022年5月からスタートした「高知大学創立75周年記念事業」では、地域社会との豊かな絆を育むことを目的とし、朝倉キャンパスに「よさこい」演舞場を開設すると共に、「高知大学校友会」を新たに立ち上げました。この校友会は卒業生や教職員のみならず、本学に関心をお持ちのあらゆるの方々にご参加いただける組織としています。今後、『県民が皆「高知大学生」』というキャッチフレーズも掲げながら、SRUとしての発展を目指してまいり所存です。

公益社団法人こども環境学会におかれましては、こども環境に関わる多くの領域の連携による総合的で学際的な学術団体として、多彩な領域へのアプローチで研究、地域活動、啓発・啓蒙活動、施策の提案と推進などを実践してこられました。これまでの活動に対して深く敬意を表します。本大会が参加される皆様にとりまして有意義な情報交換の場となりますことを期待すると共に、こども環境学会、ならびに参加される皆様のますますのご発展、ご活躍を祈念して、ご挨拶とさせていただきます。



ご挨拶 こども環境学会2025年大会（高知）

高知工科大学学長 蝶野 成臣

このたび、こども環境学会2025年大会（高知）が、四国で初めて、ここ高知県において、そして本学・高知工科大学を会場として盛大に開催されますことを、大学を代表して心より歓迎申し上げます。また、本大会の開催にあたり、企画・運営にご尽力いただいた学会関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、全国各地からご参加くださった皆様に、厚く御礼申し上げます。大学を代表してご挨拶を申し上げます。

昨今、少子高齢化、エネルギー不足、食料危機、紛争、気候変動など、深刻な社会問題が国内だけでなく地球規模で発生しています。こうした先行き不透明な状況下では、こどもたちは、社会情勢の変化によって自分の選択した進路が変更を余儀なくされるのではと、将来を不安視がちです。そのような不安を払拭するには、自分が立ち戻る所、または拠り所となる軸をしっかりと持っておくことが大事です。普段から、目の前の課題に対して、多角的な視点で物事を捉え思考を巡らせ学習し、小さな成功体験を一つずつ積み上げながら、自己肯定感を高めることで、確固たる基礎力を身につけることが重要です。こどもたちが、学びを通じて、新たな知見や価値を創造し、それらを社会に発信し、自分の夢の実現に向けて大きく成長されることを切に願います。

本学は1997年に、「アンパンマン」の作者、やなせたかし先生のふるさと、物部川流域の自然豊かな高知県香美市に、私立の工科系単科大学として開学しました。「大学のあるべき姿を常に追求し、世界一流の大学を目指す」という高邁な目標を掲げ、教育・研究・社会貢献の活動を推進してまいりました。2009年には日本で初めて私立大学から公立大学へと設置形態を変更することで、強固な経営基盤の上に自律的な運営を進めています。2015年には文科系の経済・マネジメント学群を新たな永国寺キャンパスに、2024年にはデータ&イノベーション学群を開設して、学びの幅を広げてきました。現在、システム工学群、理工学群、情報学群とあわせて理系、文系にわたる5学群体制となっています。

公益社団法人こども環境学会におかれましては、社会にひらかれた学会として、様々な学問分野の研究者、実践者、教育者、行政関係者などが学際的に集い、こどもを取り巻く環境について総合的に研究・提言・実践していく中で、地域社会における現場との協働により、こどもたちのためのよりよい成育環境を実現する非常に貴重な場であり、これまでの活動に深く敬意を表します。このような理念は、地域社会との連携の中で、来るべき社会に貢献できる人材を育成することを目標に掲げる本学の理念とも深く共鳴するものであります。本大会を通じて得られる多様な視点や知見が、今後の本学の教育研究活動にも大いに資するものと期待しております。

結びに、本大会のご成功と、こども環境学会の今後ますますのご発展、そしてご参加の皆様のご健勝とご活躍を心よりお祈り申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

1956年愛媛県生まれ。
大阪大学大学院で工学博士号を取得後、福井大学を経て高知工科大学にて教授・学科長、副学長を歴任し、現在は学長を務める。専門は流体工学、非ニュートン流体力学など。日本機械学会、日本工学アカデミー等に所属。公益財団法人大学基準協会理事も務め、学術界の発展に尽力している。



大会委員長挨拶

こども環境学会2025年大会(高知)

東京工業大学名誉教授・環境建築家
大会委員長 仙田 満

こども環境学会代表理事

1941年神奈川県生まれ。東京工業大学卒業。工学博士。1968年に環境デザイン研究所を設立。東京工業大学等で教鞭をとりながら、こどもの成育環境のデザイン、研究を中心に活動を続ける。代表作は愛知県児童総合センター、国際教養大学中嶋記念図書館、マツダスタジアム、軽井沢風越学園、小田原三の丸ホール、石川県立図書館、エディオンピースウィング広島等。著書に「子どもとあそび」(岩波書店)、「こどものあそび環境」(鹿島出版会)、「人が集まる建築」(講談社)、「こどもを育む環境 蝕む環境」(朝日新聞出版)、「遊環構造デザイン」(左右社)等。

会員の皆様

今年は高知で、こども環境学会の2025年大会が開かれます。こども環境学会は2004年に創立され、昨年、20周年を迎えました。

我が国のこどもの成育環境の状況は、なかなか良くなっておりません。かつて私が本で書いた「あそび環境の悪化の循環」という負のスパイラルから抜け出せておりません。私が遊んだ1950年代と比べて、今のこども達は約100分の1というオーダーで、あそび空間を縮小させています。それはテレビ、テレビゲーム、スマホ等のIT機器の発達により、外あそび時間も縮小しています。外で群れて遊び、さまざまな社会的なスキルを、小さなこどもの頃に獲得できなくなっているかもしれません。最近、私達が心を痛めているのは、こども・若者の自殺率の高さや、小学生においても不登校が増えている状況です。こども達が、精神的に困難な状況に陥っていることを、私達はとても気かけ、その状況を改善したいと研究、活動、実践として行動してきましたが、まだまだ成果が上がっているようにみえないのが、残念です。一方、我が国の少子化の傾向はますます高まり、人口減少が進み、地方自治体の存続もがやぶまれる地区も出てきております。

この20年、我が国は又、幾多の自然災害にも見舞われました。地震のみでいっても、その被災率は世界の平均的な場所に比べ、100倍もその危険性が高いと言われてきました。そしてこれから生まれてくるこども達は、地球温暖化の影響もあり、私達がこれまで人生で出会った困難さよりも、数倍も高くなるのではないかと予想する学者もいます。

困難を乗り越える力をもって成長して欲しい、そのために大人である私達は、どのようにこども達の成育環境を整えなければいけないのか、どうすれば自然に触れ合いながら、あそびまわれる環境を復活できるのかというのが、こども環境学会においても極めて大きなテーマといえます。

今年の大会は、現代のこどもの心を含めた問題、成育環境という点から、是非考え、社会的に提言する機会としたいと思います。

本学会は、こどもに関する多様な学術団体、活動団体を含む学際的な学術団体です。こどもを国の政策の中心にすえる「こどもまんなか」というキャッチフレーズも一般化してきました。

是非、この機会に、こども環境学会は将来の日本、将来の世界のために、こどもの成育環境をどう改善して行かねばならないかを大いに議論し、さまざまな提言をし、又それを実行していきたいと思えます。



大会主旨

インクルーシブな子ども環境

—こどもの自由は土佐の山間より—

高知大学医学部 寄附講座 児童青年期精神医学 特任教授
2025年大会(高知) 実行委員長 高橋 秀俊

こども環境学会は、設立 21 年目にして初めて四国で大会を開催します。高知県は、東西に長い太平洋の海岸線と険しい四国山地で隔絶された、温暖で美しく豊かな自然に恵まれた独自の地理環境の中、多様で自由な独特の発想を育んできました。倒幕の立役者である坂本龍馬、「アンパンマン」をはじめとする多くの創作活動で知られNHKドラマ「あんぱん」のモデルのやなせたかし、植物学者の牧野富太郎は、土佐の主要なキラーコンテンツです。大会エクスカージョンでは、自由な発想を産んだ土佐の風土を肌で感じてください。

豊かな自然が育む農業、漁業、県の9割以上占める中山間地域における林業などの一次産業は高知を代表する産業で、これら特産品も高知のキラーコンテンツと言えます。会場の永国寺キャンパスは、ひろめ市場をはじめ、高知の特産品が楽しめる繁華街に近く、大会最終日の朝は日曜市も開催されます。懇親会もふくめ、是非高知の特産品をお楽しみください。

これらの一次産業は、大規模災害や軍事的危機など国の有事においては国防上も重要な産業ですが、中山間地域を中心に人口減少と高齢化が進み、その担い手の育成は最重要課題の一つです。そして、高知県は南海トラフ地震をはじめとする災害への備えなど、多くの課題を抱える課題先進県の一つです。また、全国的に発達障害など心のケアを要するこどもが増えており、感覚過敏などの特性をもつ方も多く、様々な生活環境で特性に応じた支援が求められています。さらに新型コロナウイルス感染や急速なITテクノロジーの普及などに伴い、社会生活環境が国内外で急激に変化し、こどもを育てる環境整備が喫緊の課題です。

学際的な学術団体であるこども環境学会では、高知で開催する本大会でも「インクルーシブな子ども環境—こどもの自由は土佐の山間より—」をテーマに、こどもを取り巻く多くの課題に様々な立場で取り組みます。メイン・パネルディスカッション1では、坂本龍馬にスポットをあてた後に、一次産業の担い手を育てるためのこども環境について特別支援教育の視点も踏まえて検討します。メイン・パネルディスカッション2では、こども家庭庁の「はじめの100か月ビジョン」を踏まえ、インクルーシブな保育実践を手がかりに、今後のインクルーシブの在り方について考えます。ランチタイム・セミナーでは、やなせたかしを取り上げますので、ひろめ市場などで昼食をご用意の上、ご参加ください。

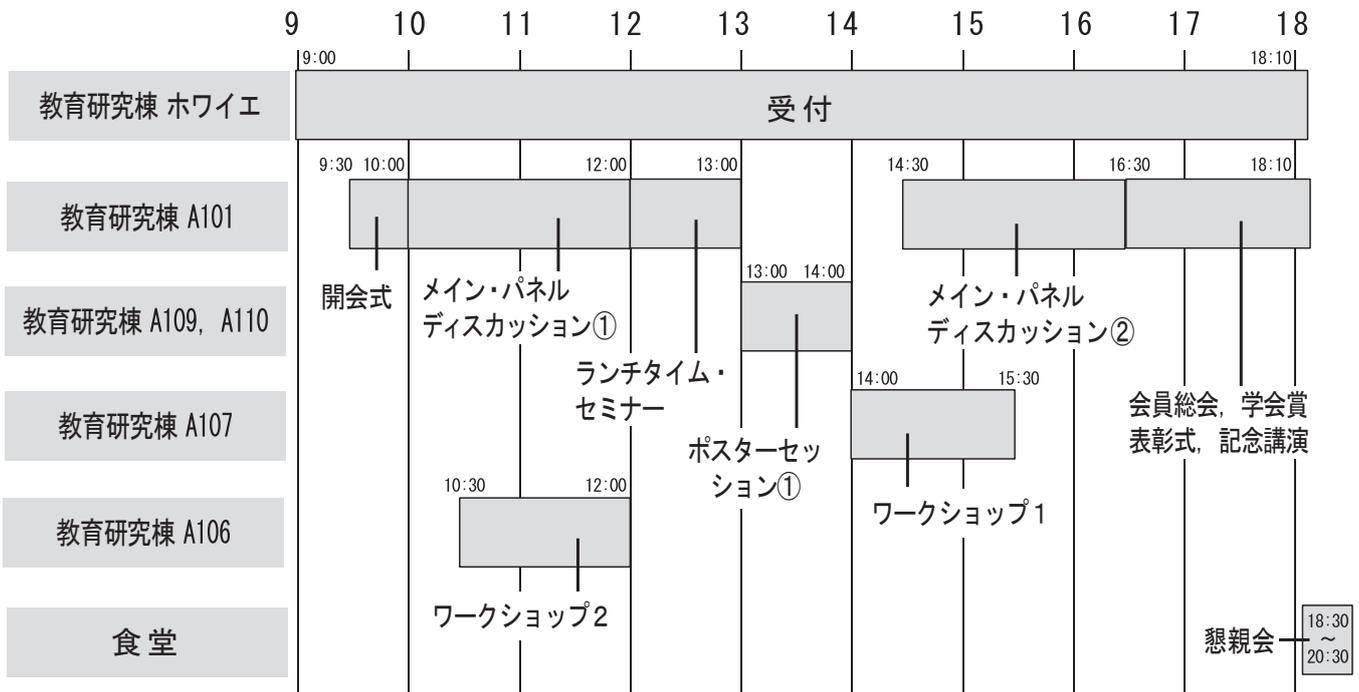
4つの分科会では、現代のこども環境に関わる様々な課題を扱います。近年、こどもや若者の意見表明・社会参画の機会の確保の重要性が認識されており、高知市の「とさっ子タウン」に参加したこどもたちや高知県で防災教育に取り組んだ生徒たちが発表予定です。また、大会期間中、落ち着ける居場所づくりのための音・照明環境対策を体験できるワークショップや、こどもも手軽に参加でき五感を使って楽しめる粘土版画のワークショップを実施します。ポスターセッションに、多くの会員が応募してくださり、大変感謝いたします。応募ポスターの中から指定口頭発表としてより深い対話の時間を設けました。

多様性に富んだ社会の中で、様々な特性や課題をもった人がいることを理解し対話を繰り返していきましょう。全国各地から多数の方のご参加を心よりお待ちしております。

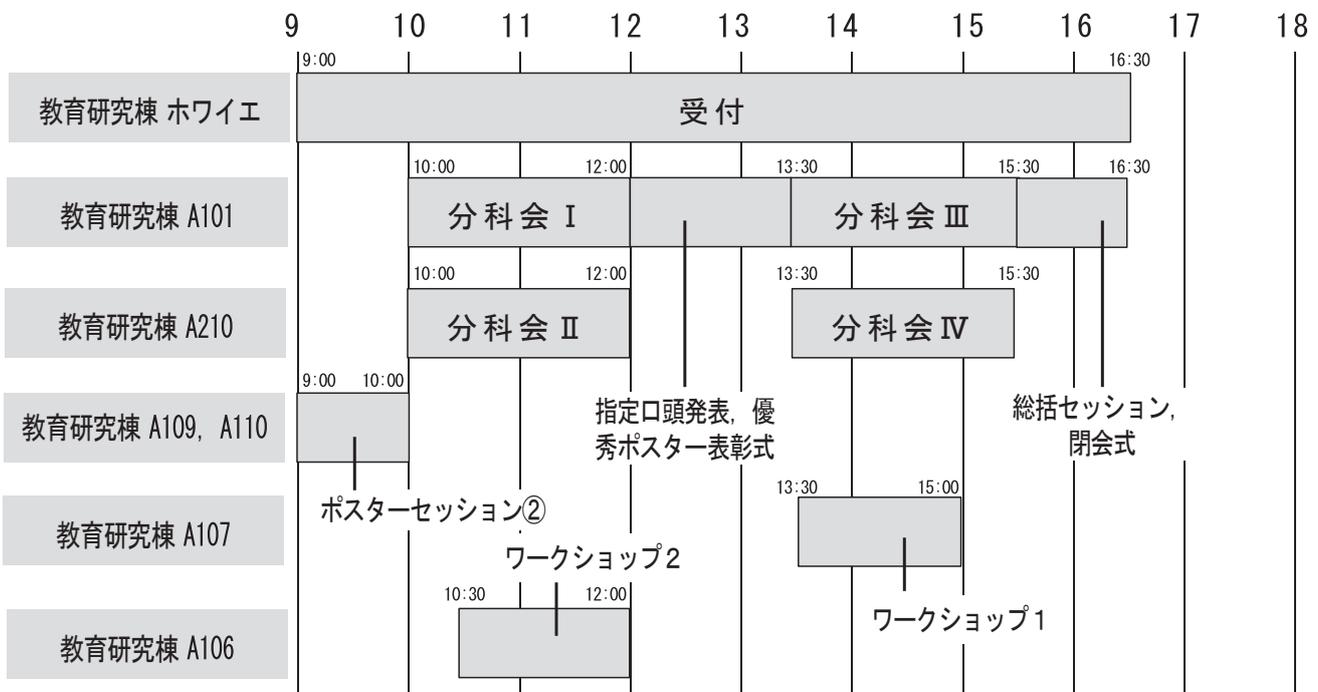
高知大学医学部 寄附講座 児童青年期精神医学 特任教授。
東京大学工学部土木工学科 卒業、大阪大学 大学院博士課程 医学系研究科 (精神医学) 修了。カリフォルニア大学サンディエゴ校精神医学教室、国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・思春期精神保健研究部などを経て現職。
専門領域は、児童青年期精神医学、臨床神経生理学、コンサルテーション・リエゾン精神医学、災害精神保健など。最近は、発達障害の感覚特性への支援、学校精神保健、多職種地域連携、特に過疎地や離島の支援などに関わっている。

タイムスケジュール

● 5月31日 (土)



● 6月1日 (日)



交通案内

高知龍馬空港	空港連絡バス	約20分	はりまや橋	約5分 徒歩	約20分
	空港連絡バス	約25分	JR高知駅	約5分 徒歩	約15分
	とさでん交通バス		中ノ橋バス停	徒歩	約3分
	とさでん交通バス		大橋通バス停	徒歩	約8分
	とさでん交通電車		大橋通電停	徒歩	約8分
高知IC	自家用車・タクシー	約15分			

高知工科大学(永国寺キャンパス)

会場：永国寺キャンパス教育研究棟
(高知工科大学・高知県立大学)
〒780-8515
高知県高知市永国寺町2番22号

※キャンパス内の駐車場は使用できませんので、ご注意ください(各自で近隣有料駐車場をご利用ください)。

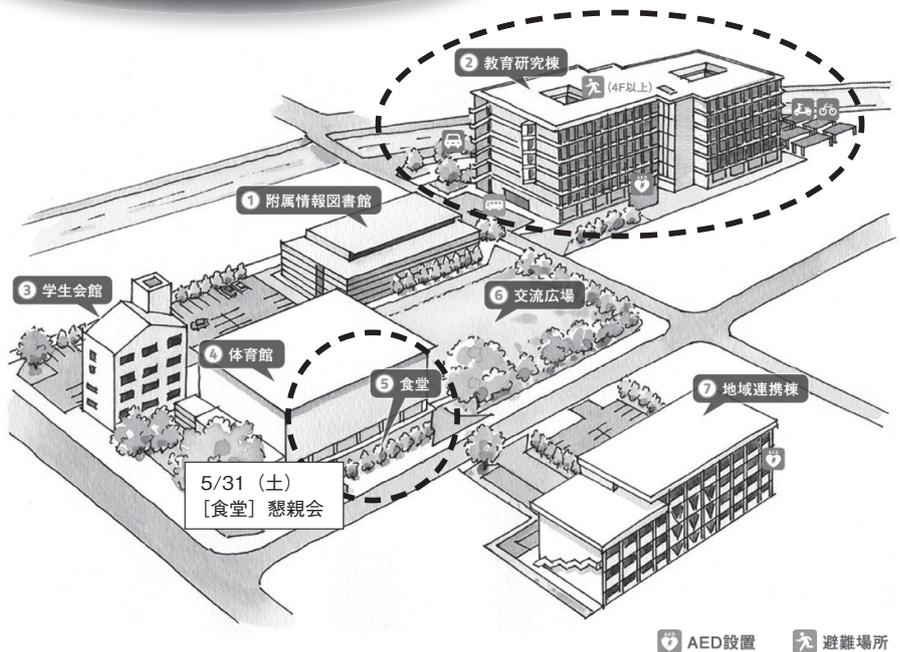
会場案内

● 5/31 (土) 教育研究棟

- [ホワイエ] 受付
[A101] 開会式、メイン・パネルディスカッション①・②、ランチタイム・セミナー、会員総会、学会賞表彰式、記念講演
[A109, A110] ポスターセッション①
[A107] ワークショップ 1
[A106] ワークショップ 2

● 6/1 (日) 教育研究棟

- [ホワイエ] 受付
[A101] 分科会Ⅰ、指定口頭発表、優秀ポスター表彰式、分科会Ⅲ、総括セッション、閉会式
[A210] 分科会Ⅱ、分科会Ⅳ
[A109, A110] ポスターセッション②
[A107] ワークショップ 1
[A106] ワークショップ 2





大会プログラム

こども環境学会2025年大会（高知）

大会テーマ

インクルーシブなこども環境

— こどもの自由は土佐の山間より —

主要プログラム

- **メイン・パネルディスカッション①**
土佐のキラコンテンツを育てたこども環境
- **ランチタイム・セミナー**
人生はよろこばせごっこ
～やなせたかしの生き方と作品世界より～
- **メイン・パネルディスカッション②**
「こどもまんなか社会」における
インクルーシブな保育とこども環境
— 「はじめの100か月の育ちビジョン」を手がかりに —
- **分科会**
 - I 多様な子どもたちの育ち・学びを支える音・光環境
～センサリーフレンドリーな環境づくり～
 - II 子どもが主役のインクルーシブなまちづくり
～「とさっ子タウン」から「こうちこどもファンド」へ～
 - III こどもと取り組む防災とまちづくり
 - IV デジタル社会を生きるこどもたちとどう向き合うか
- **ワークショップ**
 - 1: 落ち着ける居場所をつくろう
 - 2: 絵の具やインクを使わない「ねんど版画」

土佐のキラークンテンツを 育てたこども環境

- コーディネーター 高橋 秀俊（高知大学）
- パネリスト① 三浦 夏樹（高知県立坂本龍馬記念館）
- パネリスト② 田中 裕一（神戸女子大学）
- 指定討論者 公文 一也（医療法人 おくら会 芸西病院）
- 司会 松本 智津（高知大学）

趣 旨

近年新型コロナウイルスの感染拡大や急速な IT テクノロジーの進展などに伴い、社会生活環境が国内外で急激に変化しています。変化が大きく先の見通しの立てにくい時代にあって、将来を担うこどもを育てる環境の整備が喫緊の課題になっています。

高知県は、東西に長い太平洋の海岸線と険しい四国山地で隔絶された、温暖で美しく豊かな自然に恵まれた独自の地理環境の中、多様で自由な独特の発想を育んできました。倒幕の立役者である坂本龍馬、日本植物分類学の基礎を築いた牧野富太郎、「アンパンマン」をはじめとする多くの創作活動で知られるやなせたかしは、土佐の主要なキラークンテンツです。

また、豊かな自然が育むユズ・ブタン・ナス・ニラ・ショウガなどの農業、カツオを代表とする漁業、県の9割以上占める中山間地域における林業などの一次産業は高知を代表する産業で、これらの特産品も高知のキラークンテンツと言えるでしょう。これらの一次産業は、大規模災害や軍事的危機など国の有事においては国防上も重要な産業ですが、中山間地域を中心に人口減少と高齢化が進み、その担い手の育成は最重要課題の一つです。

メイン・パネルディスカッション1では、「土佐のキラークンテンツを育てたこども環境」をテーマに、土佐のキラークンテンツの中で最も有名な坂本龍馬にスポットをあてて、NHK 大河ドラマ「龍馬伝」にも関わった坂本龍馬記念館の三浦夏樹氏に、龍馬を育てた土佐のこども環境についてご講演いただきます。坂本龍馬記念館では2024年12月には感覚過敏をもつ人でも参加可能な「フレンドリーデー」を実施し、時代のニーズに合わせた情報発信をしています。続いて、国の特別支援教育行政や一次産業の一つである林業の担い手の育成に関わってきた田中裕一氏に、これまでのご経験を踏まえて、一次産業の担い手を育てるためのこども環境についてご講演いただきます。少子化の中では、学びに困難がある子どもも、しっかりと地元の産業を支えていける体制が求められます。

そして、指定討論としては、高知県東部の安芸地域において、先進的な農福連携（農業と福祉の連携）の仕掛人となった公文一也氏（芸西病院、元安芸福祉保健所）に指定討論としてご登壇いただきます。農福連携事業は、不登校傾向のある子どもたちにも地域の居場所を提供するなど、地域の心のケアにも活用されています。土佐のキラークンテンツを育てたこども環境を振り返りながら、今後のこども環境の目指すべき方向性について議論を深めていけると幸いです。

登壇者プロフィール



パネリスト①

三浦 夏樹 (Natsuki MIURA)

高知県立坂本龍馬記念館 学芸員 学芸課長

専門分野：近世末期（江戸時代末期）

担当企画展：

「-龍馬の望まなかった戦争-戊辰戦争-」展

「薩長同盟を陰で支えた男たち」展

「吉田東洋」展

「維新十傑 -創造・行動・志-」展

「龍馬の知恵袋 福井藩」展

2010年NHK大河ドラマ特別展

「龍馬伝」展企画委員（全国巡回展）

など多数



指定討論者

公文 一也 (Kazuya KUMON)

医療法人 おくら会 芸西病院 地域生活支援室
長 兼 リハビリテーション部副部長

S50 作業療法士 / H9 医療法人みずき会 芸西
病院 / H10 高知県幡多保健所 技師 / H24 高
知県安芸福祉保健所 主幹 / R7 年～現職

現在、安芸地域の農福連携は林福、水福、商福、
法福、仏福連携と拡大し 108 名の生きづらさ
を抱えた方達がナス農家等で就労しています。
農福連携は、就労の手段だけではなく地域づ
くりの核となって地域包括ケアシステムが確
立されようとしています。



パネリスト②

田中 裕一 (Yuichi TANAKA)

神戸女子大学教育学部教育学科 教授

1970 年生まれ。大阪教育大学卒業後に社会人
野球チームでプレーし、その後、知的障害者
施設、教員、兵庫県教育委員会、文部科学省
特別支援教育調査官、兵庫県立山の学校校長
という異色の経歴の持ち主。7 度の退職願を
書いて、現在、神戸女子大学教育学部教授と
して教員養成に携わる。

森林・造園に関する学習を中心とした自然の
中でさまざまな体験活動や実習、仲間と寝
食を共にする寮での共同生活を通して自分の
今後の進路を考えるというユニークな施設で
ある山の学校という校長、加えて国や県の特
別支援教育行政に関わった経験を踏まえて、
学びに困難がある子どもを育てるための環境
づくりの一事例として、校長時代の取組につ
いて話題提供する。



司会

松本 智津 (Chizu MATSUMOTO)

高知大学医学部看護学科

臨床看護学講座 小児看護学 准教授

NICU 看護師として勤務した後、看護系大学の
教員として看護基礎教育に携わる。退院後の
子どもが初めて出会う社会、家族についてや、
「子どもが健やかに育つ環境」等をテーマとし
た研究をライフワークにしている。



コーディネーター

高橋 秀俊 (Hidetoshi TAKAHASHI)

高知大学医学部 寄附講座

児童青年期精神医学 特任教授。

東京大学工学部土木工学科 卒業、大阪大学
大学院博士課程 医学系研究科（精神医学）修
了。カリフォルニア大学サンディエゴ校精神
医学教室、国立精神・神経医療研究センター
精神保健研究所 児童・思春期精神保健研究部
などを経て現職。

専門領域は、児童青年精神医学、臨床神経生
理学、コンサルテーション・リエゾン精神医学、
災害精神保健など。最近は、発達障害の感覚
特性への支援、学校精神保健、多職種地域連携、
特に過疎地や離島の支援などに関わっている。

人生はよろこばせごっこ ～やなせたかしの生き方と作品世界より～

要 旨

やなせたかし（1919～2013）は香美市香北町出身の漫画家であり、詩人・絵本作家・イラストレーター・雑誌編集等、幅広い分野で活躍したマルチクリエイターです。代表作であるアンパンマンは、自身の生い立ちや戦争経験などをもとに、時代や国や宗教などに左右されない真の正義＝「逆転しない正義」とは何かを問い続け、やなせなりの結論として具体化させたヒーロー像です。やなせは、「本当の正義とは恰好よくない」ものであり「自らも深く傷つくもの、そしてそういう献身の心、自己犠牲の精神がなければ成しえない」ものであると説きます。

やなせがそういったヒーロー像を生み出した背景を知るには、やなせの生い立ちを語る必要があります。やなせは、実父と5歳に死別し、小学校2年の頃に再婚によって柳瀬家を出て行った実母とも別れます。2歳下には弟がいましたが、弟は医者をしていた伯父の養子となります。まだ母が恋しい年頃であったやなせでしたが、弟が養子に入った伯父の家で、養父と養母に心配を掛けないようにと居候として気を使う毎日でした。やなせ作品の中でアンパンマンとともにロングセラーとなっている絵本『やさしいライオン』『チリンのすず』（いずれもフレーベル館）等でも血のつながらない親子の姿を描いていますが、やなせの作る物語の多くは、愛や希望に満ちている反面、必ずどこかに哀しみが漂っています。それはこのようなやなせ自身の生い立ちからきていると考えられますが、やなせ作品最大の魅力は「生きるよろこび」だけでなく「生きるかなしみ」が描かれているところであり、それこそが多くの読者から支持される所以でもあります。

また、やなせは非常に遅咲きの作家でもあります。働き盛りだった40代から50代にかけてはヒット作に恵まれず、後輩のマンガ家たちにも追い越され、以前として絶望の中にいました。アンパンマンがテレビアニメとなり全国的な人気作家の仲間入りを果たした頃には、やなせは既に70代を迎えていました。

長らく「くる仕事は全て受ける」という精神で、漫画家以外の仕事にも挑戦し続けていたやなせは、それらの経験が全て血肉となり、最終的にマルチな才能を開花させ唯一無二のエンターテイナーへと変貌していくのです。

やなせは後年「生きている以上、自分の命をできるだけ有意義に使って暮らしたい、それは他者を助け、喜んでもらうことに繋がる。“喜ばせごっこ”をすれば、誰もが幸せに暮らせると思う。」と語っていました。大器晩成であったやなせが最後に見つけた「生きる意味」とは、経済的な豊かさや社会的な名声を得る事ではなく、自分の作品を通じて目の前の人を笑顔にすることだったのです。

今回の講演では、やなせたかし自身が様々な人生の苦境を乗り越え、晩年アンパンマン作品で成功を収めるまでの過程やそれを支えた自身の人生観、またそこから生み出された作品の数々をご紹介しますとともに、没後10年を経てなお、遺したやなせ作品が我々に与える“生きる希望”、その作品世界の魅力についてご紹介します。



仙波 美由記

公益財団法人やなせたかし記念アンパンマンミュージアム振興財団 事務局長（学芸員）

愛媛県出身。経営学修士（MBA）。米国留学後、民間ギャラリー勤務を経て2003年、財団に学芸員として入職。やなせたかし作品の収集・保存・研究などを行い、香美市立やなせたかし記念館の展覧会事業に携わる。2012年より現職。事務局長として法人運営全般に従事しながら、日々やなせたかしの作品の普及、振興に努める。やなせたかし没後は高知県内に留まらず、同氏の遺言によって創設した「やなせたかし文化賞」事業や「やなせたかし展」事業など、全国に向けて“やなせたかし文化”を伝播させるために活動している。

「こどもまんなか社会」における インクルーシブな保育とこども環境 —「はじめの100か月の育ちビジョン」を手がかりに—

- コーディネーター・パネリスト 大豆生田 啓友（こども環境学会副会長・玉川大学教授）
- パネリスト 渡邊 英則（港北幼稚園 理事長・ゆうゆうのもり幼保園 園長）
- 指定討論者 藤枝 俊之（ふじえだファミリークリニック）
- 司会 松本 智津（高知大学）

主旨説明

こども家庭庁が誕生し、子どもの権利条約の理念を法制化した「こども基本法」が作られ、子ども・若者に関わるさまざまな分野での施策を総合的に推進するための指針として「こども大綱」が策定されました。さらに、乳幼児期については「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの100か月の育ちビジョン）」が出されたのです。これは、全てのこどもの誕生前から幼児期までの生涯にわたるウェルビーイングを目的に策定された羅針盤であり、乳幼児期の育ちの重要性を社会全体で支えることが国から示された画期的なものと言えます。なお、このはじめの100か月の育ちビジョンは、「多様性を尊重し、包摂的に支援する」ものであり、「共生社会の実現に向け」たもので、「幼児期までの時期から切れ目なく」、「インクルージョンの考え方を前提」と記されています。そこで、本パネルディスカッションでは、「はじめの100か月ビジョン」を踏まえ、インクルーシブな保育実践を手がかりに、今後のインクルーシブの在り方について考えたいと思います。

登壇者プロフィール



コーディネーター・パネリスト
大豆生田 啓友 (Hiroto Otake)
玉川大学教育学部教授。乳幼児期の教育・保育・子育てで支援が専門。こども環境学会副会長、日本保育学会副会長。こども家庭庁「こども家庭審議会」委員、「幼児期までの育ち部会」部会長代理。文部科学省「今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会」委員、栃木県幼児教育センター顧問、等。主著に『大豆生田啓友対談集 保育から世界が変わる』（北大路書房）『子どもが中心の「共主体の保育」(小学館) など。



パネリスト
渡邊 英則 (Hidenori Watanabe)
学校法人渡辺学園 港北幼稚園理事長兼園長、認定こども園ゆうゆうのもり幼保園園長。関東学院大学、國學院大学、田園調布学園大学大学院の非常勤講師。こども環境学会理事、日本保育学会評議員、中央教育審議会（初等中等教育分科会幼児教育と小学校教育の架け橋特別委員会）委員。全国認定こども園連絡協議会副会長、横浜市幼稚園協会副会長。令和6年4月より港北幼稚園内に児童発達支援事業所『ゆわっこのおうち』を開所し、港北幼稚園の園児とのかかわりの中でインクルーシブ保育の実現に取り組む



指定討論者
藤枝 俊之 (Toshiyuki Fujieda)
ふじえだファミリークリニック 院長・小児科。愛媛県四国中央市で小児科診療所・病児保育室を運営する。学校医や園医活動、市こども計画や地域福祉計画策定に関わる。コロナ禍では居場所づくりに私設公民館を開設、2025年『四国中央子育てフェスタ』実行委員長



司会
松本 智津 (Chizu Matsumoto)
高知大学医学部看護学科臨床看護学講座小児看護学准教授。NICU 看護師として勤務した後、看護系大学の教員として看護基礎教育に携わる。退院後の子どもが初めて出会う社会、家族についてや、「子どもが健やかに育つ環境」等をテーマとした研究をライフワークとしている。

幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン (はじめの100か月の育ちビジョン) 概要

令和5年12月22日 閣議決定

はじめの100か月の育ちビジョンを策定し全ての人と共有する意義

幼児期までこそ、生涯にわたるウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に
幸せな状態）の向上にとって最重要

✓ 誰一人取り残さないほしい育ちの保障に向けては課題あり

※児童虐待による死亡事例の半数が0～2歳/就園していないこどもは、家庭環境により、他のこどもや大人、社会や自然等に触れる機会が左右される

✓ 誕生・就園・就学の前後や、家庭・園・関係機関・地域等の環境間に切れ目が多い

⇒ 社会全体の認識共有×関連施策の強力な推進のための羅針盤が必要

目的 全てのこどもの誕生前から幼児期までの

「はじめの100か月」から生涯にわたるウェルビーイングの向上

こども基本法の理念にのっとり整理した5つのビジョン

1 こどもの権利と尊厳を守る

⇒ こども基本法にのっとり育ちの質を保障

- ✓ 乳幼児は生まれながらにして権利の主体
- ✓ 生命や生活を保障すること
- ✓ 乳幼児の思いや願いの尊重

2 「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める

⇒ 乳幼児の育ちには「アタッチメント（愛着）」の形成と豊かな「遊びと体験」が不可欠



「アタッチメント（愛着）」＜安心＞

不安な時などに身近なおとなが寄り添うことや、
安心感をもちたらず経験の繰り返しにより、安心の
土台を獲得

豊かな「遊びと体験」＜挑戦＞

多様なこどもやおとな、モノ・自然・場所など身近
なものとの出会い・関わりにより、興味・関心に合わせた
「遊びと体験」を保障することで、挑戦を応援

3 「こどもの誕生前」から 切れ目なく育ちを支える

⇒ 育ちに必要ない環境を切れ目なく構築し、
次代を支える循環を創出

- ✓ 誕生の準備期から支える
- ✓ 幼児期と学童期以降の接続
- ✓ 学童期から乳幼児と関わる機会

4 保護者・養育者のウェルビーイング と成長の支援・応援をする

⇒ こどもに最も近い存在をきめ細かに支援

- ✓ 支援・応援を受けることを当たり前に
- ✓ 全ての保護者・養育者をつながること
- ✓ 性別にかかわらず保護者・養育者が
共育

5 こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す

⇒ 社会の情勢変化を踏まえ、こどもの
育ちを支える工夫が必要

- ✓ 「こどもまんなかチャート」の視点
(様々な立場の人がこどもの育ちを応援)
- ✓ こどもも含め環境や社会をつくる
- ✓ 地域における専門職連携やコーディネーター
の役割も重要



【「はじめの100か月」とは】

本ビジョンを全ての人と共有するためのキーワードとして、母親の
妊娠前から幼保小接続の重要な時期（いわゆる5歳児～小1）まで
がおおむね94～106か月であり、これらの重要な時期に着目

はじめの100か月の育ちビジョンに基づく施策の推進

- ✓ こども大綱の下に策定する「こどもまんなか実行計画」の施策へ反映
- ✓ 全ての人の具体的な行動を促進するための取組を含め、こども家庭庁が
司令塔となり、具体策を一体的・総合的に推進

全てのこどもの生涯にわたる
身体的・精神的・社会的（バイオサイコソーシャル）
な観点での包括的な幸福



⇒ 全ての人のウェルビーイング向上にもつながる

多様な子どもたちの 育ち・学びを支える音・光環境

～センサリーフレンドリーな環境づくり～



イヤマフを装着する子ども



吸音された小空間



子どもとともに設えられた“カームルーム”

近年、保育現場や学校教育において、さまざまな特性のある子どもたちがともに過ごすインクルーシブな育ち・学びの場作りへの関心が高まっています。就学前保育の場においては、2023年の制度改正に伴って保育施設と児童発達支援事業所の併設が増加しており、保育・教育現場でのインクルーシブな場作りが進められています。このような現場では、環境刺激に対する過敏や鈍麻など非定型な感覚特性をもつ子どもも多い一方で、音や光などの感覚面に配慮した環境整備の方法は普及しておらず、課題が残っています。

そこで本分科会では、こうした子どもたちの感覚の多様性に焦点を当て、感覚面でのさまざまな特徴をもつ子どもたちが共に過ごし学ぶためのインクルーシブな環境の実現に必要な対応について、検討します。パネリストとして、子どものメンタルヘルス・感覚特性を含む発達障害がご専門の小松静香氏、発達支援実践者であり音環境づくりのご経験のある松本知子氏、環境刺激が特に多いオープンプラン型小学校の学校運営の経験をおもちの山本幹文氏、建築環境工学、光・視環境がご専門の吉澤望氏にご登壇いただき、コーディネーターからは音環境に着目した環境調整の実践事例をご紹介します。感覚特性、療育・特別支援教育実践、音・光環境の専門の立場から研究・支援・環境づくりの知見を提供し、フロアの皆さんとも意見交換をしながら、センサリーフレンドリーな環境のあり方について、議論を深めたいと思います。

なお、落ち着ける居場所づくりをテーマとしたワークショップの開催も予定しており、合わせてご参加をお待ちしています。

コーディネーター 1

上野 佳奈子 (Kanako UENO)

明治大学理工学部建築学科 教授。
専門は建築音響学、環境心理学。こども施設の音環境改善に向けて、音響設計支援、音環境保全規準の作成、現場のニーズに対応した音環境づくり、それらの普及に向けた活動に取り組んでいる。

コーディネーター 2

野口 紗生 (Saki NOGUCHI)

浜松学院大学地域子ども教育学科 講師。一般社団法人こどものための音環境デザイン 理事。
専門は発達・教育心理学、音響学、保育環境・学習環境。子どもの豊かな育ち・学びを支える音環境づくりをテーマに、保育療育現場でのアクションリサーチに取り組んでいる。

パネリスト 1

小松 静香 (Shizuka KOMATSU)

高知大学医学部寄附講座児童青年期精神医学に所属。高知大学医学部附属病院子どものこころ診療部精神科医師。
発達障害や、うつ、摂食障害、不登校、などを対象に、18歳以下の子どもとそのご家族のメンタルヘルスの問題に幅広く取り組んでいる。

パネリスト 2

松本 知子 (Tomoko MATSUMOTO)

児童発達支援センター 浜松市根洗学園 園長。
想定外の多い現場の中で、「そうきたか」と切り替えるセンサーが育ち、進化してきました。わからないことも多いけれど、「子どもの行動に意味がある」を大事に、その答え探しを今も続けています。

パネリスト 3

山本 幹文 (Mikitake YAMAMOTO)

高知市立江陽小学校 校長。
「学びの山を登ろう」という学校教育目標のもと、仲間と助け合いながらあきらめずに挑戦していく子どもたちの学びを支援。また、どの子どもも安心してきける環境づくりに取り組んでいる。

パネリスト 4

吉澤 望 (Nozomu YOSHIZAWA)

東京理科大学創域理工学部建築学科 教授。国際照明委員会 CIE 第3部会長。
専門は建築光・照明環境。照明が空間の知覚や人の心理・ストレスに与える影響を研究しながら、様々な感覚特性・属性を持つ人々に配慮した国際基準やガイドの作成に従事している。

子どもが主役の インクルーシブなまちづくり

～「とさっ子タウン」から「こうちこどもファンド」へ～

高知には、こどものまち「とさっ子タウン」(2009年～)と、子ども達がリアルな自治にコミットする「こうちこどもファンド」(2012年～)があります。「誰もが参加できるようにしたいよね」というひとりのつぶやきが、かき消されることなく分身ロボット「オリヒメ」によるリモート参加に繋がったのは、一人ひとりが大切にされ、自分の意見を言える場所だから。

この分科会では「とさっ子タウン」、「こうちこどもファンド」の立ち上げから関わる畠中氏と、現役で活躍する高校生や担い手となった若者をパネリストに迎えます。世代も、年齢も、住む地域も、障害の有無も越えて繋がり、互いを大切にすることを目指し、楽しみ、それが当たり前と考える自然体のインクルーシブな姿勢が、どのように生まれ根付いていくのか、大人はどうあるべきなのか、彼らの言葉と対話を通して、共に考えます。



「とさっ子タウン 2024」では分身ロボット「オリヒメ」(写真中央)を介して外出困難な子どもも参加。放送局でアナウンサーなどの仕事を体験し、買い物を楽しんだ。



「こうちこどもファンド」では、子どもが審査員を務める公開審査会が開かれ、応募した子どもたちがプレゼンテーションし、質疑応答を経て助成が決定する。

写真：高知市地域コミュニティ推進課

パネリスト 1

畠中 洋行 (Yoko HATAKENAKA)

1951年高知生まれ。2007年に「とさっ子タウン」のしくみを立案、以後運営に携わり、2011年には「こうちこどもファンド」の立ち上げに携わり、2012年以降同ファンドアドバイザーとして関わっている。

パネリスト 2

岩崎 怜 (Rei IWASAKI)

「とさっ子タウン」副実行委員長・「とさっ子タウン」くいしんぼユニット長。高知市出身の22歳。小学4年～5年生、中学1年～3年生まで「とさっ子タウン」に市民として参加。高校1年生～現在まで実行委員として活動を続けている。

パネリスト 3

片岡 優斗 (Yuto KATAOKA)

小学校5年生で2代目「とさっ子タウン」の市長を務めた。また「こうちこどもファンド」の初代審査員も務め、現在では、「とさっ子タウン」の実行委員として毎年8月の本番に参加している。

パネリスト 4

竹崎 万紗 (Kazusa TAKEZAKI)

2018年度から「こうちこどもファンド」に久重 natural チームとして参加。子ども主体の里山保全活動を行う。2023年に久重 youth を設立。2025年度はこども審査員を務める予定。

パネリスト 5

武林 青海 (Umi TAKEBAYASHI)

2018年度から「こうちこどもファンド」に久重 natural チームとして参加。子ども主体の里山保全活動を行う。2023年に久重 youth を設立。好きな活動は山での星空観察。

パネリスト 6

田部 未空 (Misora TABE)

2013年に、「こうちこどもファンド」の審査員を経験。翌年、団体を立ち上げて2年間活動した。2016年には隠岐島前高校に島留学。高知大学を卒業後、現在は島根県・海士町で教員を目指し勉強中。

パネリスト 7

松本 佳奈 (Kana MATSUMOTO)

「とさっ子タウン」市民を経て2018年に学生ボランティアとして運営に参画。同年実行委員会のメンバーに加入し現在に至る。

パネリスト 8

山本 稜平 (Ryohei YAMAMOTO)

2023年より高知清掃隊として高知市内の清掃活動・ボランティア募集活動を行っている。主体は高校生で、学生目線での様々な活動を企画運営している。

ディスカッション進行

畠中 智子 (Tomoco HATAKENAKA)

1990年頃より老若男女誰もが参加しやすい会議スタイルとしてワークショップに注目。ファシリテーターとしてあらゆるジャンルの話し合いの場をサポートしている。2008年より「とさっ子タウン」実行委員。

開始あいさつ

花輪 由樹 (Yuki HANAWA)

金沢大学・准教授 / 「こどものまち」研究者。2009年より「とさっ子タウン」に通い、皆が坂本龍馬に見えるその熱意に圧倒される。子ども・若者が楽しく地域に関わることの意義を探っている。

コーディネーター 1

北方 美穂 (Miho KITAGATA)

社会福祉法人陽光福祉社会評議員、出版社役員。『こどもまちづくりファンド～ミュンヘンから高知へ～』『こどものまち』で世界が変わる』を編集。2008年よりフィンランドのインクルーシブを視察。

コーディネーター 2

中川 千鶴 (Chizuru NAKAGAWA)

(公財) 鉄道総合技術研究所 首席研究員、人間工学専門家。2018年まで学会誌編集部員。高知の活動を知り、子どもと大人の新しい幸せな関係に未来を感じている。



盲学校での防災キャンプ



地域の防災活動での高校生の取組



小学校への高校生の出前授業

災害は大きく分類して、自然災害と人為災害の二つがあり、わが国は地理的に地震や水害など大規模自然災害が発生しやすく、国内で毎年のように発生しています。災害対策は、歴史的にもわが国の最重要課題の一つで、発災直後の急性期から中長期にかけて土木・建築・都市計画・医療・福祉・教育など様々な領域での防災対策が求められており、平時から災害に備えた対策が近年全国的に進められています。災害による被害予測システムの進歩に伴い、東南海トラフ地震のような大規模地震災害対策などでは災害に強いまちづくり、いわゆる事前復興の必要性が認識されています。

学際的な学術団体であるこども環境学会は、東日本大震災を契機に設立された多領域の学術団体である防災学術連携体に早期から参加し、これまで災害対策に関わってきました。こどもは、高齢者、障害者、外国人、妊産婦などとともに災害時要支援者に含まれ、発災時に配慮を要することが知られています。近年、こども関連の政策決定過程において、こどもの意見表明・反映の必要性が認識されており、こどものニーズを把握するためには、こどもの意見を聞き、政策決定にも参加していくシステムが必要で、防災対策においてもそうでしょう。

本分科会では、高知県内の取組として特別支援学校での取り組み、事前復興が進んでいる安芸地域にある高知県立安芸中・高等学校や桂浜に近い高知市立浦戸小学校での防災教育を紹介する予定です。パネリストとして本学会の大西宏治副会長、安部芳絵先生、コメンテーターとして三輪律江副会長が登壇し、本学会のこれまでのあゆみや今後の方向性に関して講演します。これまでの南海トラフ地震や大規模水害など古くから大規模災害が頻発し「防災先進県」である高知県における防災教育について、こども自身の報告も交えて紹介し、今後の我が国においてこどもと取り組む防災とまちづくりについてディスカッションします。

パネリスト

大西 宏治 (Koji OHNISHI)

こども環境学会副会長、富山大学教授。
卒業論文以来、一貫してこども環境の空間的側面に注目した研究に取り組む。専門は人文地理学、こどもの生活空間研究、地理空間情報を活用した市民参画まちづくり。著書：『子どもの初航海—遊び空間と探検行動の地理学』（古今書院、共著）、『遊びの力』（萌文社、共編著）ほか。

パネリスト

安部 芳絵 (Yoshie ABE)

こども環境学会こどもと災害部会副会長、工学院大学教授。
災害後の子どもたちの思いや経験の記録化、意見反映について研究。公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン理事として、『2024年能登半島地震子どもアンケート～震災から半年 いま伝えたい子どもたちの声～』実施に関わった。

その他のパネリスト

高知県内の取組として、高知県立浦戸小学校、高知県立安芸中・高等学校、高知県立盲学校での防災教育を紹介する予定です。

コメンテーター

三輪 律江 (Norie MIWA)

こども環境学会副会長、横浜市立大学大学院都市社会文化研究科・教授。

(株)坂倉建築研究所、横浜国大を経て2011年より現職。第26期内閣府学術会議子どもの成育環境分科会委員長の他、こども環境学会ではこどもと災害部会副会長も担当。“子育て”に寄り添うまちづくりを主たるテーマとした実践的研究を行っている。

コーディネーター

高橋 秀俊 (Hidetoshi TAKAHASHI)

高知大学医学部 寄附講座 児童青年期精神医学 特任教授。
東京大学工学部土木工学科 卒業、大阪大学 大学院博士課程 医学系研究科(精神医学) 修了。カリフォルニア大学サンディエゴ校精神医学教室、国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 児童・思春期精神保健研究部などを経て現職。専門領域は、児童青年期精神医学、臨床神経生理学、コンサルテーション・リエゾン精神医学、災害精神保健など。最近では、発達障害の感覚特性への支援、学校精神保健、多職種地域連携、特に過疎地や離島の支援などに関わっている。

デジタル社会を生きるこどもたちと どう向き合うか

AI や IT の進化は、人間の脳神経を模倣しながら飛躍的な発展を遂げ、私たちの日常生活に深く浸透しています。こうした技術の進展は、利便性の向上やウェルビーイングの促進といった恩恵をもたらす一方で、情報過多や依存、フェイクニュースの拡散など、新たなリスクや課題も生み出しています。

こうした状況の中で、未来を担うこどもたちがデジタル技術とどう関わり、どのような価値観を育てていくべきかは、今まさに問われるべき重要なテーマです。本分科会では、IT / AI 技術の最前線で活動する実践者たちが登壇し、テクノロジーとこどもとの関係について多様な視点から提起します。

身体性の回復や仮想空間での協育、学校外の学びの場づくり、最先端 IT 教育の可能性、地方都市でのデジタルものづくりの拠点づくりなど、異なるフィールドからの実践事例を通して、こどもたちがデジタル技術とどのように出会い、向き合っているのかを共有します。

単に技術を批判的に捉えるのではなく、こどもたちが健やかに、そして創造的にデジタル社会を生きるために、私たち大人がどのような視点や関わり方を持つべきか。クロストークやフロアとの対話を通じて、多様な立場から知恵を持ち寄り、これからのあり方を共に考えていきます。



ジャングルスパイダー @ハダシランド



小学生から大人まで幅広い世代が一緒に参加し、デザインツールを利用するワークショップの様子



創造性を発揮するための環境づくり



「感じる→ふりかえる→選ぶなおす」
あそびと生活

コーディネーター

土肥 潤也 (Junya DOHI)

NPO 法人わかものまの代表理事 / 株式会社 C&Y パートナーズ代表取締役。

全国各地の自治体と協働し、こども・若者の社会参画 / 意見反映の推進を進める。オンラインプラットフォームを活用したこどもの意見聴取にも取り組む。

パネリスト①

三由 野 (Nao MIYOSHI)

ポーザー株式会社 代表取締役

2022 年から山口県周南市にてエクストリーム・スポーツ体験を中心とした「ハダシランド」を開始。開始から 3 年で子育て世帯 7000 会員を集め、一般財団法人公園財団主催公園・夢プラン大賞 2024 最優秀賞。

綿谷孝司 (Koji WATADANI)

合同会社アクト・スリー CEO

広告代理店経営、コンサルタント、行政や企業の事業アドバイザーを務める傍らハダシランドを HUB とした街づくり事業を産官学連携で多数推進している。

パネリスト②

野崎 浩平 (Kohei NOZAKI)

土佐塾中学・高等学校 教育 DX 担当 / 一般社団法人ハンズオン共同代表

教育現場での DX 推進に取り組み、デジタルものづくりの導入支援や授業実践に加え、地域企業と連携した商品販売プログラムの企画を行っている。また、学校外では、教育に関する相談に応じる「会に行けるセンセイ」という活動にも取り組んでいる。

パネリスト③

末廣 優太 (Yuta SUEHIRO)

特定非営利活動法人みんなのコード クリエイティブハブ事業部 部長、みんなのクリエイティブハブ 発起人

茨城県生まれ。大阪大学大学院人間科学研究科修了。2018 年に石川県へ移住。民間・行政・NPO など多様な立場から、教育機会の地域間格差解消に取り組む。2024 年に「みんなのクリエイティブハブ」を立ち上げ、「すべての子どもが創造的な表現活動に熱中できる場づくり」を全国 9 拠点と協働。

パネリスト④

佐藤 史康 (Fumiyasu SATO)

みんなで育てる! 放課後コドモンズ Little Seekers 施設長

民間学童保育施設にて、学童期における遊びを通じた主体的発達支援としての保育や、こども主導の環境デザイン・支援体制の構築に取り組んでいる。

須藤 邦彦 (Kunihiko SUTO)

山口大学教育学部

主に特別支援教育に関する領域で、発達障害や知的障害の子どもへの支援と支援者(保育士や教員等)を支えるコンサルテーションを行っている。専門は、応用行動分析、行動コンサルテーション。臨床心理士。公認心理師。

コメンテーター

小柴 満美子 (Mamiko KOSHIBA)

人間総合科学大学・埼玉医科大学

自然や社会環境で遊び学ぶ脳の発達や進化を、IT 活用で分子・生理、認知心理、運動・表情・言語の信号に基づき再現的に理解し発達支援システム開発を目指す。経済産業省 IT 人財育成 AKATSUKI プロジェクト (山口 2024) 運営で発展探索。



吸音材を用いて設定した落ち着ける居場所



吸音・遮音の効果の体験ワーク



模型パーツをつかった居場所づくりワーク

保育室や教室など、こども達が日常を過ごす空間は、住宅とは異なる環境刺激に溢れており、刺激に敏感な子どもは居づらさを感じることがあります。なかには、騒がしさやまぶしさなどの環境刺激が大きな負荷になり、室内にとどまることが難しい場合や疲労をため込んでしまう場合もあります。インクルーシブな生活・学習環境では特に、活動から離れて落ち着いて過ごせる居場所を設えること、そこに音や光の“環境調整”の視点を取り入れることが、こどもたちの助けになります。

今回のワークショップは、建築環境の視点からこども施設を見直し、落ち着く居場所の整え方を考える機会を提供します。音環境については、これまで保育室や教室で活用された音環境調整用の補助具を体験いただきながら、吸音・遮音といった音のコントロール方法について理解を深めるワークを行います。光環境については、光量や光色を調整できる照明器具やシェード、光の波長分布や色の特性を見ることが出来る簡易分光器などを使って、明るさやまぶしさと光の特性について理解を深めます。また、日常の環境を振り返り、体験していただいた環境調整を取り入れてどのような居場所づくりができるか、グループワークを通じて考えます。

保育室や教室の環境づくりに“音”や“光”の視点を取り入れてみたいという皆さま、さまざまなデモや体験ワークをご準備して、ご参加をお待ちしております。

なお、ワークショップで体験いただく補助具や器具、関連資料などは、ワークショップ実施時以外にもご覧いただけます。時間が合わずワークショップにご参加いただけない方も、お気軽にお立ち寄りください。

◆開催日時 5月31日(土) 14:00～15:30
6月1日(日) 13:30～15:00

◆場 所 永国寺キャンパス 教育研究棟 A107

◆対 象 者 こども施設の環境調整に関心のある
教員・保育者・建築関係者向け

◆定 員 各回 20名程度(事前申込)

◆参 加 費 無料

上野 佳奈子 (Kanako UENO)

明治大学理工学部建築学科 教授
専門は建築音響学。特別な支援が必要なこどものための環境づくりとして、身近な材料でつくる音環境調整用補助具の提案、聴覚の多様性に意識を向ける活動などに取り組んでいます。

野口 紗生 (Saki NOGUCHI)

浜松学院大学地域子ども教育学科講師。一般社団法人こどものための音環境デザイン理事。
研究テーマは「子どもと音環境」。音体験ワークショップなど様々な立場の方々と共に環境づくりに取り組むアウトリーチ活動にも力を入れています。

吉澤 望 (Nozomu YOSHIZAWA)

東京理科大学創域理工学部建築学科 教授
専門は建築光環境・照明環境。光がストレスや不快感に与える影響に関する研究などを通して、人に優しい光環境の実現に向けた検討を進めています。

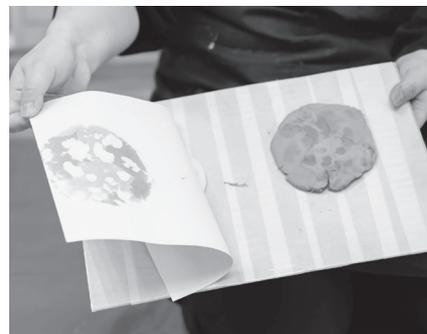
絵の具やインクを使わない 「ねんど版画」



粘土での版づくり



紙に摺りとる



ねんど版画の完成

本ワークショップでは、紙粘土の柔らかな感触を楽しみながら、色や形を自由に变化させて創作できる「ねんど版画」を紹介します。版画には木版画や紙版画など様々な種類がありますが、ねんど版画では身近な素材である粘土を使用します。粘土は未就学児でも扱いやすく安全な素材として広く親しまれており、自由な形づくりが可能です。また、その感触自体を楽しむこともできます。

内容としては、粘土で版をつくり、摺りにとって作品を完成させる工程を繰り返すことで、表現の幅を体験的に広げていきます。一般的な版画ではインクや絵の具で着色してその色を紙に摺りとるため、準備する道具が多く、汚れるリスクがあるなどが課題となりやすいですが、今回は着色に市販のカラー粘土を使用し、その色を直接紙に摺りとる手法を用います。粘土で版を形成した後、あらかじめ湿らせておいた紙を粘土の上に重ねて手でこすり、色を摺りとります。さらに、粘土同士を混ぜて混色を楽しむこともでき、表現の幅が広がります。使用する紙の種類も複数用意し、紙の違いによる摺り上がりの変化も楽しむことができます。版画は準備が大変という意見をよく耳にしますが、本ワークショップでは絵の具をこぼす心配がなく、準備の手間も軽減されることで、実践者は子どもたちの創作活動にじっくりと寄り添うことができます。

最後は参加者の皆さまと制作を振り返り、感想を共有しながら、場所や対象年齢に応じた展開についても話し合いの場をもうけたいと思います。さらなる応用の可能性を共に模索していければと考えていますので、皆さまのご参加をお待ちしています。

◆開催日時 5月31日(土) 10:30～12:00
6月1日(日) 10:30～12:00

◆場 所 永国寺キャンパス 教育研究棟 A106

◆対 象 者 幼児から大人まで
(小学校低学年以下の子どもは大人同伴でご参加ください)

◆定 員 20名程度(事前申し込み)

◆参加費 無料

屋宜 久美子 (Kumiko YAGI)

愛媛大学教育学部 講師
東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程修了。専門は美術教育(絵画)。著書(共著)に『実践につながる新しい幼児教育の方法と技術』、『美術と教育のあいだ』など。絵画作品の創作・発表活動や、地域の環境資源を活用したワークショップにも取り組んでいる。

本村 佳奈子 (Kanakano MOTOMURA)

沖縄県立芸術大学美術工芸学部絵画専攻 非常勤講師
筑波大学人間総合科学学術院人間総合科学研究群芸術学学位プログラム(博士後期課程)在籍。水性木版画を主とした創作研究を行うとともに、未就学児親子、特別支援学校などで版表現の魅力とその楽しさを伝えるワークショップの活動を行なっている。



会員総会・こども環境学会賞の発表

2024年度(第20回)

会員総会

5月31日(土) 16:35～16:45

学会賞受賞者表彰式および記念講演会

5月31日(土) 16:45～18:10

こども環境学会賞の発表

各賞の対象と審査委員

総評・講評

会場：教育研究棟 A101

学会賞

5月31日(土) 16:45~18:10

[会場] 教育研究棟 A101

2024年度(第20回)こども環境学会賞 学会賞受賞者表彰式および記念講演会

1. 顕彰委員会委員長挨拶：高木 真人

2. 論文・著作賞

- (1) 論文・著作賞選考委員会委員長挨拶：住田 正樹
- (2) 論文・著作賞①表彰
矢田 努（愛知産業大学名誉教授）、高木 清江（愛知産業大学）
総合的な評価よりみたくども環境に関する一連の研究
—評価要因の解明より得られるハードとソフトの環境づくりに関する論考—
- (3) 論文・著作賞②表彰
村上 八千世（常磐短期大学）、馬場 耕一郎
「オープントイレ」で保育が変わるトイレ環境から子どもの発達と主体性を支える（中央法規）

3. デザイン賞

- (1) デザイン賞選考委員会委員長挨拶：竹原 義二
- (2) デザイン賞①表彰
水上 哲也（水上哲也建築設計事務所）
のだのこども園
- (3) デザイン賞②表彰
伊東 啓太郎（九州工業大学大学院）、須藤 朋美、壱岐南小学校、福岡市、宮園 遼、
緒方 友希はじめ、プロジェクトチームのメンバー
Growing Place—福岡市立壱岐南小学校ビオトープ
- (4) デザイン賞③表彰
三澤 文子（Ms 建築設計事務所）、上野 耕市
穴粟わかば
- (5) デザイン奨励賞①表彰
伊藤 立平（伊藤立平建築設計事務所）、上川 慎也（上川慎也建築設計事務所）、
山千代 航（tokotodesign 合同会社）
佐川おもちゃ美術館
- (6) デザイン奨励賞②表彰
◆久野 由美子（株式会社環境デザイン研究所）
キッズツリーハウス認定こども園本郷
- (7) デザイン奨励賞③表彰
◆松尾 由希（一級建築士事務所アンブレ・アーキテクト）、松尾 宙
キディ腰越保育園・子育てキディ腰越

4. 活動賞

- (1) 活動賞選考委員会委員長挨拶：神谷 明宏
- (2) 活動賞表彰
上野 佳奈子（明治大学）
感覚特性の多様性理解に基づく音環境調整の普及に向けた活動



2024年度(第20回) こども環境学会賞の発表

Association for Children's Environment

顕彰委員会委員長 高木 真人、論文・著作賞選考委員長 住田 正樹、デザイン賞選考委員長 竹原 義二
活動賞選考委員長 神谷 明宏、自治体施策賞選考委員長 田川 正毅

2024年6月より公募致しましたこども環境学会の学会賞につきましては、2024年10月末までに論文・著作賞9件、デザイン賞16件、活動賞2件、自治体施策賞0件、合計27件のご応募をいただきました。

選考委員による厳正な審査の結果、論文・著作賞2件、デザイン賞3件、デザイン奨励賞3件、活動賞1件、以上合計9件が選定されました。

受賞者および総評・講評は以下の通りです。

(順不同、敬称略)

●各賞受賞者

こども環境学会賞 論文・著作賞

《論文・著作賞》

- ◆矢田 努(愛知産業大学名誉教授)、高木 清江(愛知産業大学)
『総合的な評価よりみたこども環境に関する一連の研究—評価要因の解明より得られるハードとソフトの環境づくりに関する論考—』
- ◆村上 八千世(常磐短期大学)、馬場 耕一郎
『「オープントイレ」で保育が変わる トイレ環境から子どもの発達と主体性を支える』(中央法規)

こども環境学会賞 デザイン賞

《デザイン賞》

- ◆水上 哲也(水上哲也建築設計事務所)
『のだのこども園』
- ◆伊東 啓太郎(九州工業大学大学院)、須藤 朋美、
壱岐南小学校、福岡市、宮園 遼、緒方 友希はじめ、
プロジェクトチームのメンバー
『Growing Place—福岡市立壱岐南小学校ビオ
トープ』
- ◆三澤 文子(Ms 建築設計事務所)、上野 耕市
『穴栗わかば』

《デザイン奨励賞》

- ◆伊藤 立平(伊藤立平建築設計事務所)、
上川 慎也(上川慎也建築設計事務所)、
山千代 航(tokotodesign 合同会社)
『佐川おもちゃ美術館』

- ◆久野 由美子(株式会社環境デザイン研究所)
『キッズツリーハウス認定こども園本郷』

- ◆松尾 由希(一級建築士事務所アンブレ・アーキテクト)、
松尾 宙
『キディ腰越保育園・子育てキディ腰越』

こども環境学会賞 活動賞

《活動賞》

- ◆上野 佳奈子(明治大学)
『感覚特性の多様性理解に基づく音環境調整の普及に向けた活動』

こども環境学会賞 自治体施策賞

《自治体施策賞》

該当なし

以上が受賞されたものですが、選考に漏れた方々におかれましても受賞者に劣らないすぐれた学術活動や実践活動であることを申し添えますとともに、さらに一層の活躍を祈念いたします。また更に多くの会員の皆様が次回の学会賞に応募されますことを期待いたします。

各賞の対象と選考委員

(1) 論文・著作賞

近年中に完成し発表された研究論文および著作出版物であって、こども環境学の進歩に寄与する優れたもの。

選考委員

委員長 住田 正樹（九州大学／放送大学名誉教授・発達社会学）
 委員 福岡 孝純（日本女子体育大学招聘教授・スポーツ環境）
 仙田 満（東京工業大学名誉教授・建築学）
 大豆生田啓友（玉川大学教授・保育）
 根ヶ山光一（早稲田大学名誉教授・発達行動学）
 大谷由紀子（摂南大学教授・建築学）
 安部 芳絵（工学院大学教授・教育学）
 菊池信太郎（菊池医院院長・小児科医）
 三木 祐子（帝京大学教授・医療看護）

外部委員 望月 重信（明治学院大学名誉教授・子ども社会学）

(2) デザイン賞

近年中にデザインされた環境作品（建築・ランドスケープ・インテリア・遊具・家具・グラフィックその他）であり、こども環境学的見地からも高い水準が認められる独創的なもので、子どもの成育に資することが認められるすぐれた環境デザイン。

選考委員

委員長 竹原 義二（関西大学客員教授・無有建築工房・建築家）
 委員 佐久間 治（九州女子大学教授・建築学）
 小池 孝子（東京家政学院大学教授・住居計画学）
 千代章一郎（島根大学学術研究院教授・建築学）
 鮫島 良一（鶴見大学短期大学部准教授・同附属三松幼稚園園長・彫刻家）
 松本 直司（名古屋工業大学名誉教授・建築学）
 仙田 考（田園調布学園大学准教授・ランドスケープ）
 石原 健也（千葉工業大学元教授・建築家）

金田一亜弥（金田一デザイン代表・アートディレクター／デザイナー）

外部委員 手塚 由比（手塚建築研究所・建築デザイン）

(3) 活動賞

こども環境に寄与する、上記以外の活動（施設運営・行政施策・社会活動・その他）であって、近年中に完成した業績および継続的な活動によってその成果が認められた活動。

選考委員

委員長 神谷 明宏（豊岡短期大学特別招聘教授、NPO 法人コミュニティーワーク研究実践センター理事）
 委員 齊藤 ゆか（神奈川大学教授・生涯教育・ボランティア・NPO）
 西野 博之（NPO 法人たまりば理事長・川崎市子ども夢パーク前所長・フリースペースえん代表）
 寺田 光成（日本体育大学助教・ランドスケープ学／まちづくり）
 木村 歩美（おおぞら教育研究所代表・保育環境・保こ幼小の連携）
 田村 光子（元植草学園短期大学准教授・子育て支援）

外部委員 柳下 史織（公益財団法人東京YWCA・青少年育成事業部統括責任者）

(4) 自治体施策賞

こども環境に寄与する行政施策であって、近年に完成、完了した施策、若しくは継続中の施策でその成果が認められるもの、又は近年に着手された施策で、顕著な成果が生じ始めていると認められるもの。

選考委員

委員長 田川 正毅（東海大学教授・建築学）
 委員 高木 真人（京都工芸繊維大学教授・建築学）
 請川 滋大（日本女子大学教授・児童学）
 三輪 律江（横浜市立大学学術院教授・建築学）
 櫻木 耕史（岐阜工業高等専門学校准教授・建築学）
 河原 啓二（社会医療法人財団聖フランシスコ会 マリア地域総合支援センター センター長・公衆衛生）
 梶木 典子（神戸女子大学教授・地域居住学）

外部委員 奥山千鶴子（NPO 法人子育てひろば全国連絡協議会理事長）

総 評

こども環境 論文・著作賞

論文・著作賞
選考委員長
住田 正樹

今年度は委員の交代がありました。矢田 努先生、高橋 勝先生、五十嵐 隆先生が辞められ、新たに大谷 由起子先生（建築学）、安部 芳絵先生（教育学）、菊池 信太郎先生（小児科医）、三木 祐子先生（医療看護）の4人の先生が委員になられて、選考委員会はこれまでの9人体制から10人体制になりました。

今年度の応募件数は論文5編、著作4本で、昨年度より著作は3本増えましたが、論文は6編も減りました。しかも、そのうち1件ずつが選考委員会の「審査基準(内規)」の3)「過去3年以内にこども環境学会賞を受賞していないこと」、また「応募要項8.その他の共通事項」の「過去3年以内に同一部門の業績で受賞した者は応募できない。(以下略)」に抵触するために審査対象から外さざるを得ませんでした。したがって今年度の審査対象は論文4編、著作3本の計7件となりました。

また、応募作品には選考委員1名がメンバーに加わった作品がありましたので審査基準(内規)にしたがい、今年度のすべての審査から外れてもらうことにしました。

審議の結果、今年度は学会賞として論文1編、著作1本を選定しました。

論文の部の学会賞は、矢田努会員と高木清江会員の「総合的な評価よりみたこども環境に関する一連の研究—評価要因の解明より得られるハードとソフトの環境づくりに関する論考—」と題する研究で、こども環境の計画研究に総合的な評価という新しい視点を導入し、新たな研究領域を開拓しようという意欲的な研究です。課題設定の独創性・新規性、研究の将来性が高く評価されました。

著作の部の学会賞は、村上 八千世会員と馬場 耕一郎会員の『「オープントイレ」で保育が変わる—トイレ環境から子どもの発達と主体性を支える—』(中央法規)と題する書で、保育園での乳幼児の生活を実際に、つぶさに観察し、トイレで学習することの発達可能性を引き出すという極めてユニークな研究書です。研究のユニーク性、有用性が高く評価されました。

今年度は、応募件数もこれまでよりも少なく、残念に思うところもありますが、応募された論文には今回は、本学会の紀要論文だけでなく、他学会の掲載論文も複数あり、本学会の裾野が広がっていく様相を感じさせました。

今後も奮って応募していただければと思います。

矢田 努（愛知産業大学名誉教授）、高木 清江（愛知産業大学）

総合的な評価よりみたこども環境に関する一連の研究 —評価要因の解明より得られるハードとソフトの環境づくりに関する論考—

本研究は、総論と各論から成り、各論は7編の論文（日本建築学会計画系論文集掲載の論文6編、日本インテリア学会論文報告集掲載の論文1編）によってさまざまな分野における研究方法の妥当性と計画的操作の可能性を検討しています。

総論では、こども環境の計画研究に総合的な評価という新しい視点を導入し、新たな研究領域を開拓しようとするものの意義と方法について述べています。ここでは総合的な評価を満足度評価としてとらえていますが、そもそも満足という概念は、こども環境においては、経済的価格の側面、規模や内容、機能性などの魅力的側面、楽しさ、居心地、快適性、デザイン性といった心理的側面、さらにリクリエーションや教育などにおける実用的価値の側面などにおいて、総合的に高いレベルの価値を反映し、こ

論文
著作賞

ども環境の計画・政策の領域において重要な役割を果たすことが期待されるにもかかわらず、「満足」概念の曖昧性、測定や評価の困難性とそれ故の信頼性の欠如、「満足」概念に対する固定的イメージなどのためにこれまで取り上げられることがなく、なかなか進展してこなかったことを指摘しています。こうした困難を著者たちは子どもを対象としたインタビュー調査の積み重ねによる満足度評価データの蓄積、および重回帰分析や主成分分析などの多変量解析による系統的要因分析によって切り抜け、満足度の予測式導出方法を提示して、計画的操作が可能なこと、計画条件の提案が可能であることを示しています。

そしてこの総合的評価が高い子ども環境条件を探るために、各論において、街区公園、大学講義室、科学博物館、室内広場型アトリウム、美術的展示室、小児専門病院病棟などを調査し、総合的評価を満足度評価としてこども環境の研究・計画上の新たな概念とするものの妥当性と可能性を検討しています。そしてこの総合的評価という新たな視点を導入することによってこども環境の研究、および空間・環境計画上の新たな研究領域を提案しています。課題設定の独創性や新規性、研究全体の論理性、そして研究の有用性や将来性が高く評価されました。(住田正樹)



論文
著作賞

村上 八千世 (常磐短期大学) 著、馬場 耕一郎 (こども家庭庁) 監修

「オープントイレ」で保育が変わる — トイレ環境から子どもの発達と主体性を支える —

(中央法規 2024)

本書は保育施設のトイレ環境と子どもの排泄発達を扱ったものです。

これまでトイレというと、一般に「臭い」とか「汚い」、また「不快」(怖い、暗いなど)というイメージがあり、そのためにそうしたイメージを払拭しようとしてトイレの空間や場所、設備などが取り上げられ、つまり「設備空間」として捉えられてきたけれども、しかし、子どもがいつでも安心してトイレに行けるようになるためには心地良さやリラックスできる場所、安心できる場所というような「居住空間」としての要素が求められると著者は述べています。特に保育施設の場合には「発達」の観点を取り入れたトイレ環境の必要性を提示しています。そこで「オープントイレ」という新たな考え方を提案しています。

「オープントイレ」とは子どもに開かれたトイレという意味で、子どもがいつでも一人で安心していける、行きたいときに好きなように使えるトイレのことです。そうしたトイレを作り出すために著者は、保育施設において子どものトイレの使用時間、使用回数、使用中の行動、使用前後の行動、また年齢による行動の違いなどをつぶさに、客観的にじっくりと観察しています。そしてそうした観察調査の成果を取り入れた年齢別の「オープントイレ」の事例を数多く紹介し、子どもたちの「オープントイレ」の使い方や使い方の変化、また使い方を巡っての子ども同士の関係を観察して、それが子どもたちの身体的機能の発達や社会性の発達と結びついていることを具体的に述べています。実にユニークな研究です。

研究のユニーク性や新規性、研究目的の明解性、そして実用上の発展性が高く評価されました。(住田正樹)

総 評

デザイン賞
選考委員長
竹原 義二

こども環境 デザイン賞

こども環境学会デザイン賞は子どもの視点に立つ建築、造園、遊具、プロダクト、絵本、グラフィック等さまざまなデザイン領域の総合的な評価により優秀なデザイン作品を表彰するものである。

20回目となる今年度は応募作品が16点あり、10名の選考委員がリモートで書類審査を行い、7作品を現地審査の候補に決定した。

今回応募された作品のなかに増築や整備を重ねることで、建物や園庭の様子が完成時より豊かな保育環境が形成されている事例がみられた。

また提出作品も建物だけでなく多岐にわたっていたため、それぞれの作品について議論を重ねたことを記しておく。現地審査は2～3名の委員で構成し、各作品を審査した。

最終審査はリモート開催ではなく建築会館にて顔を合わせての審査会となり、8名出席、1名リモート、1名海外出張のため書類を事前に提出の中、現地審査を担当した各委員から作品の講評を受け議論を重ねた。

各作品の講評や議論が一段落した後、投票にてデザイン賞を決定した。

優秀賞は三作品が同票となったため再度それぞれの作品について議論を重ねた。

「福岡市立壱岐南小学校ビオトープ」は、2002年竣工から2024年まで22年間の活動のなかで、手を加えながら変化し続ける自然の環境をビオトープを介して子どもたちが学ぶことができている。それは活動記録ではなく、子どもたちとの協働のプロセスを継続し、変化し続けることで森の空間の素晴らしさを全員が確認できた。これはまさしくゴールのないデザインではあるが、子どもたちにとって今まさに必要とされている課題であることが評価された。

「のだのこども園」は、地域のコミュニティ拠点となる交流棟と保育棟の二つの棟をインナーテラスで分節している。さらに建物をずらすことにより内と外の関係性がより強くなり、100mの長さを持つ園舎と既存樹木の距離感が活かされた配置計画は、新旧が一体に感じられ、地域と接続する環境づくりが高く評価された。

「宍粟わかば」は、地方のこども園が新しくなる模範的な園づくりが秀逸である。山や川や田んぼのなかに位置する地形を読み込んだ配置計画は豊かな自然環境とのつながりのなかで、園庭を中心に平面が構成されている。ゆったりとした「広縁」と「濡縁」がゆるやかに内と外をつなぎ、地元産の杉材が空間を豊かにし、地域循環型の建築の有様が活かされるなど、模範的な認定こども園として評価された。

今回はそれぞれの作品が独自性を持っているため、優秀賞を三作品にすることで全員一致でデザイン賞が選考された。

奨励賞についても同様に審議した結果、三作品が選考された。

最後にデザイン賞、奨励賞を獲得なさった作者に敬意を表するとともに、本デザイン賞に応募、推薦をしてくださった皆様に深く感謝する。今後も子どもの成育に必要な本質を見極めながら新たなデザインへの挑戦を続けていきたい。

(竹原義二)



デザイン賞

水上 哲也 (水上哲也建築設計事務所)

のだのこども園

非常にのびやかなこども園である。園舎も素晴らしいのだが、まず園庭が素晴らしい。広々とした土の園庭には築山や手作りの木製遊具が設えられ、園児達が思い思いに駆け回っている。既製の遊具などは一切存在しない。園庭には既存の樹木が影を落とし、園児達に心地良い遊び場を提供している。

この園庭に全長 100m の園舎が幅 3m もある広い外廊下を介して接続している。外廊下は保育棟から広いインナーテラスへと続き、さらに交流棟へと続く。インナーテラスはかなりゆったりとした広さで、子供達の活動の幅を広げる空間となっていることがうかがえる。

こののびやかな配置を生かすために、構造にも工夫が凝らされている。一見木造に見える園舎だが、園庭に面した側の柱と桁梁は鉄骨となっている。その結果、園舎は園庭に対して限りなく開かれた空間となっている。通常であれば光を遮ってしまう桁梁ですら、木梁の上に追いやられ、透明感のあるファサードを実現している。

建築の構造からディテールに至るまで、構成が明快に見てとれるのもこの建築の素晴らしいところである。屋上のデッキすら下地材が横から見えるように作られていて小気味良い。

理にかなった構成がディテールから園舎全体に貫かれ、園庭と園舎が一体となった気持ちの良い空間を生み出していた。子供達が自然と触れ合いながらのびのびと育つであろう環境が実現されていた。(手塚由比)

デザイン賞

伊東 啓太郎 (九州工業大学大学院)、須藤 朋美、壱岐南小学校、福岡市、宮園 遼、緒方 友希はじめ、プロジェクトチームのメンバー

Growing Place—福岡市立壱岐南小学校ビオトープ

福岡市内の平地の住宅地に立地する、小学校の自然体験学習のための大型ビオトープ計画である。ビオトープは、コの字型校舎の中庭駐車場の場所に創生され、池・小川・小橋・植栽・土壁等で構成されている。設計計画は、ランドスケープ・エコロジー (景観生態学) を専門とする大学研究者 (かつデザイナー) である応募者らのファシリテートにより、小学校の子どもや教員との協働ワークショップを重ね、地域の自然環境や人と自然の関係についての学びも踏まえ、理想とする中庭ビオトープの要素や大枠がかたちづけられた。さらにデザイン構成・詳細にあたっては、Multi-Functional Landscape Planning (MFLP) やアフォーダンス理論等を応用し展開されている。特に、時間の経過が変化の豊かさをもたらす空間を目指したプロセス・プランニングの設計手法は、創生 15-20 年後を見据えた自然生態デザイン (植生 (樹木含む)、生態系) の成長や豊かさが、いまそこに感じられる。

池や小川、土壁等の曲線の自然美が印象的で、また水場、取水口は粘土の壁で覆われ、人工物が排され、空間内は自然の世界に溢れている。

ビオトープは校舎内の廊下・教室から身近に豊かな自然が感じられ、また適度な木陰と水辺空間、アンジュレーションのある土面等、子どもスケール (安全面含む) かつ居心



地の良さが両立している。日常的な自然あそび、自然環境学習に積極的活用されている。

創生以降、さらなる地域樹種の植栽とともに、外部からの地域動植物、特に近年は希少植物の移入が見られ、生物多様性、地域生態系の保全に大きく貢献している。

本プロジェクトの特徴のひとつは、長年にわたる大学のサポート・協力（設計・施工、維持管理、生態調査、学校授業支援）にある。学生が代々継続してビオトープの調査、維持管理、学校授業支援を実施し、学生自身の生態教育や環境保全についての学びにもつながっている。2000年代に多くの小学校でビオトープが創生されつつ、熱心な教員が異動等により、活動が継続されないケースが見られるなか、公立校に創生された大規模な本ビオトープが長年にわたり、生態環境が維持され、子どもたちの居場所となり、生き物調査等自然学習の活性化がいまも見られることは、大変稀有な事例といえる。

Growing Place –自然が育っていく場であるとともに、人も、人と自然の関係性も育っていく場所になっている。子どもたちと自然の環境として、時間軸への配慮及び丁寧な計画が高く評価された。（仙田考）



三澤 文子（Ms 建築設計事務所）、上野 耕一

宍粟わかば

屋根の連なりと背後の山とが呼応した応募資料の全景写真にまず魅せられた。訪問したのは曇混じりの寒い日で屋敷門のようなゲートを潜った先の園庭に園児の姿はなかったが、C型園舎により一方が田圃に開かれ、限界まで低く抑えられた軒先により裏山も感じることができる園庭は、そうした環境的連関をこども達に感じさせるであろうことが容易に想像できた。

園庭を囲む濡縁と一枚引き戸でつながる広縁は内部の主役であり、低い天井と窓台のベンチがこども達の身体スケールに合っていて魅力的である。広間としての遊戯室からは高窓の先に裏山が見える。ここに外観から内部空間まで一貫して環境とのつながりを求めた設計者の強い意志を感じた。そうした意図は地場木材を地元大工で組み上げた架構にも表れており、OMソーラーによる温熱環境計画とも相俟って室内を優しく包み込んでいる。

コンセプトの「おおきなうち」は外観の記号的表現や部分的デザインにとどまってしまうことが多い。しかしこの園では、全体から細部までを通してこども達の「家」を実現しており、デザイン賞に相応しい優れた作品であると高く評価された。（石原健也）



伊藤 立平（伊藤立平建築設計事務所）、上川 慎也（上川慎也建築設計事務所）、山千代 航（tokotodesign 合同会社）

佐川おもちゃ美術館

佐川おもちゃ美術館は、高知県北西部にある佐川町の山里に、2023年に道の駅と併設置された内装空間で、東京おもちゃ美術館が監修する全国12館の一つであり、同館も他館と同様に、あそびと学びとアート、木育、地域文化との連携、おもちゃ学芸員制度による多様で多世代の施設参加交流などをコンセプトに計画されており、

館内全体があそびを誘発する「木の空間」としてデザインされている。また、現地審査で感じた本施設の最大の魅力は、日本を代表する植物分類学者・牧野富太郎博士の生誕地で多くの豊かな植生を持つ佐川の地域特性を踏まえた、「木でつくられた植物のおもちゃ」が数百も館内にちりばめられており、それらをこどもたちが植物採取や野菜の収穫などのあそびを通じて「植育」の体験空間となっていること、また、佐川の林業の特徴である「自伐型林業」に関わっている林業家、木工職人、アーティストやデザイナーが計画初期段階から協働して、おもちゃ、什器、インテリア空間づくりに参加することで、「山とこどもを繋ぐ空間づくり」に成功していることであろう。木材加工においても、実際の里山植生を踏まえた自然木の活用、彫刻的加工、組子などの伝統工芸技術、あるいは、地元のデジタルファブリケーション技術も活かすことで、立体的で変化に富む空間づくりを実現している点も高く評価された。また、地域のソールフードとしての田舎寿司を木のおもちゃにして調理・販売体験にするあそび空間や、こどもたち自身の木加工体験のための工房など、丁寧なあそびとまなびの工夫が館内随所にみられた。

以上から、現地審査の評価として、デザイン奨励賞作品として選定された。一次の書類審査においては、デザイン賞候補としても期待されたが、現地にて、施設があくまでも内装デザインであること、また、施設の庭にあたる外部活動空間と内部空間との中間領域にあたる開口部が、建築工事として既に決定されていたため、こどもたちの外遊びを十分に誘発する空間構成にはなっていなかったことから、残念ながらデザイン賞対象作品としては一步及ばなかった。 (佐久間治)

久野 由美子 (株式会社環境デザイン研究所)

キッズツリーハウス認定こども園本郷

キッズツリーハウス 認定こども園本郷は愛知県日進市の郊外に建つ認定こども園である。敷地は幹線道路に面した田んぼを造成し、南北に細長い形状を持っている。北と西側には車の駐車スペースが確保されているが、こどもたちからは植え込みで車が見えないようにカバーされている。訪れるとエントランスポーチと名付けられた屋根のある半屋外のテラスが迎えてくれる。素通しなテラスの向こうは「もりのひろば」と名付けられた園庭があり、気持ちの良い居場所が用意されていた。朝の混雑はなさそうで安心した。南側に離れのように造られた子育て支援棟があり、この位置に平屋建てを計画したことで建物全体の高さを抑えることに成功している。

平面は中央に「つどいのひろば」と名付けられたホールがある広場型ホールの空間構成で東西に保育室が配され外部につながっている。

東西を三分割した断面は、広場を大空間にするために迫持で三段階の架構が連続し大空間を実現している。設計者はツリーハウスをイメージしたと説明された。

ホールに設けられた大階段を登っていくと建物の構造体が見渡せた。2階に設けられたキャットウォークが「つどいのひろば」を囲い取り込んでいるため回遊でき、高い位置に設けられた排煙用の水平窓を容易に開閉できるなど、小さい幅ではあるが水平移動ができることで構造面と実用面の両方が活かされている。しかし手すりとなる縦格子のデザインをもう少し考慮すると空間が引き締まったのではないかと

デザイン
奨励賞

感じた。

大屋根の下部に設けられた南北を結ぶ空中ブリッジをこどもたちと一緒に渡ってみた。ブリッジは床下が見えるようポリカーボネートで覆われており、安全ではあるが遊びという行為については考えさせられた。

2階に設けられた物干しスペースである屋上デッキの納まりなども無理なく収めていることや、保育室の周りにはデッキテラスが四面設けられ、低く抑えられた屋根が架けられているため、雨の日でも半屋外で活動できるなど、園庭づくりもしっかりと作り込まれ、こどもたちの遊びもエリアごとに特色のある遊び場が園舎を囲い込んでいるのも評価できる。奨励賞として本作品を推薦したい。（竹原義二）



松尾 由希（一級建築士事務所アンブレ・アーキテクト）、松尾 宙

キディ腰越保育園・子育てキディ腰越

本園は、鎌倉市立腰越保育園の建替えにあたり、地域子育て支援センターを併設し、園児や親子だけでなく地域の方々が参画できる子育て支援の拠点の場として計画された。

主な特徴の一つは異年齢の活動を各保育室から感じられるように、保育室を雁行型に配置し園児の行き来が可能な回遊式になっていること。2～5歳児クラスは中央の多目的室に接しており、さらに大きな庇が設けられた2階テラスがそれぞれをつなぎ回遊を可能にしていた。庇下に設けられたベンチはすぐ座れる高さに設計されており、外から帰ってきたこども達が休憩をしたり、保育士の話を落ち着いて聞くことができたりと外と中をつなぐ楽しい場所となっている。

もう一つは、環境負荷の軽減においても直射日光を遮る庇が大きな役割を果たしているということと、屋根の勾配を少なくし屋根全体にソーラーパネルを設置したことで、平常時だけでなく災害時でも自家発電機によって電力の使用が可能となり、災害に強くこどもを守る設備としても活用が期待されていた。

斜めに繋がった保育室は日常的に園児が行き来をするような場面は見受けられなかったが、今後の実用化を期待したい。また、選考委員会では上空から見た時のソーラーパネルの景観はどう考えるべきかという議論も上がったが、限られた空間の中で景観条例を考慮し植栽も丁寧に施されていた。

何より保育園と子育て支援が別々の管轄で扱われる自治体が多い中、同じ法人が運営していることが子育てをしている親子にとって安心できる居場所となり、子育てサポートにおいて貴重な場所だと感じた。園庭では、園児と子育て支援センターに遊びにきたお子さんとの交流もあり、公私連携型保育所として地域とつながる子育て支援の今後あるべき姿を垣間見ることができた。（金田一亜弥）



総 評

こども環境 活動賞

神谷
明宏

活動賞
選考委員長

本年度は審査委員も一部若返りを図って心新たに審査に臨んだのだが、活動賞はここ数年に渡り応募数が減少し、本年度の応募数は過去最低の2件となくなってしまった。若干落ち込んだ気持ちにはなったものの審査員一同は真摯に評価に取り組んだ。評価の方法は応募資料を7名の審査員一人一人が丁寧に拝見した上で評価コメントを書き込み、全員のコメントが集まった時点で一覧表に取りまとめ、それを基に1件1件確認をしながら審査員全員の合議によって公正かつ慎重に評価を行った。評価の視点は「こどもの参画」「先駆性」「継続性」「地域やコミュニティとの関係作り」「直接効果・波及効果」「継続性」の5点となる。その結果、本年度は活動賞1件を選ばせていただいた。

応募の『感覚特性の多様性理解に基づく音環境調整の普及に向けた活動』は基本的に大学研究室の研究活動がベースになっているものの、多様なニーズを持つこどもの感覚特性に合わせた心を落ち着かせるスペース作りというユニークな視点をさまざまな場所でのこどもとのワークショップにより、安価な素材を用いた実践的な展開方法を提案している。結果としてこどもの直接的な参画は見られないものの波及効果の可能性を含め、実現性の高い活動報告となっていることが好評価となった。一方で『[できないことができること] ハダシランド式プレイパーク』はプロの写真家に依頼したと思われる生き生きとしたこどものあそぶ姿を捉え、その姿にピッタリのキャッチコピーに溢れる素敵なパンフレットが資料として提出された。しかし、それを拝見しても会員数やリピーターの多さについての報告はあるものの、テーマである何ができないことができるようにしているのか、「パルクール」や「スラックライン」に挑戦すればそれが可能になるのか、当事者であるこどもの声や保護者の声や効果も見えないままにダイバーシティ空間に富む体験教育の場と言われても単なる移動遊具の提供にすぎないのではないかとの懸念が残る内容であった。

活動団体からすれば本学会の活動賞への応募は乏しい活動資金や資料作成の手間を考えると無駄なものに映るかもしれない。しかし、日々こどもに向き合い奮闘している多くの活動団体にとってはその活動報告こそがより良い支援のヒントとなる可能性を秘めているのである。そのため我々学会活動賞選考委員は理事の方々をはじめ学会の活動に関わる全ての会員に、他に類を見ないユニークで面白い活動を積極的に推薦して欲しいとお願いをしているのである。そのためにも皆さまにおかれましては単に活動賞応募の紹介にとどまることなく応募に不慣れな方々にもう一步踏み込んで、趣旨説明や活動内容について記載のポイントを丁寧にアドバイスしていただき、応募の決意をしてくださった方々がより良い形で、自分たちの活動成果を広く紹介してくださるよう支援をしていただけると幸いと考えている。



上野 佳奈子 (明治大学)

聴覚特性の多様性理解に基づく 音環境調整の普及に向けた活動

活動賞として評価するにあたり、研究に基づく実践であることから、実際的なことも参画の展開はみえにくい内容であった。しかしながら、保育環境の視点、フリースクールや学童保育、遊び場など、多様な子ども環境において、特性のある子どもたち、不登校にある子どもも、安心して過ごすことができる環境づくりや手立てが提案されていた点が高く評価できる。また、現場職員が手に入りやすい素材、子どもが集う場に違和感ない雰囲気での活動が提案されていることは、今後の活動の普及が大いに期待できる内容であると評価できる。

音環境という個別性があり、センシティブな問題でもあり、さらに発達の遅れのみならず、子どもから大人まで、物質的なものから自然環境によるものまで広い視野を持った課題について研究されている視点が、これからの社会実装に向けて可能性ある活動として評価に値する。

結果 選考委員会の決により、参加者全員一致で活動賞とすることとした。
(田村光子)



子ども環境学会2025年大会(高知)
ポスターセッション・指定口頭発表

ポスターセッション・指定口頭発表の参加要領

ポスターセッション ①

5月31日(土) 13:00～14:00 (教育研究棟 A109、A110)

ポスターセッション ②

6月1日(日) 9:00～10:00 (教育研究棟 A109、A110)

指定口頭発表

6月1日(日) 12:00～13:00 (教育研究棟 A101)

優秀ポスター表彰式

6月1日(日) 13:05～13:25 (教育研究棟 A101)

ポスターセッション

① 5月31日(土) 13:00~14:00 [会場] 教育研究棟A109、A110

② 6月1日(日) 9:00~10:00 [会場] 教育研究棟A109、A110

こども環境学会 2025年大会(高知) ポスターセッション参加要領

2025年度大会でのポスターセッションは、会場での掲示発表となります。
ポスター発表抄録の提出は合計66件でした。

会場でのポスター出展・掲示方法

- 発表用のポスターの掲示は、下記の時間に指定場所に〈A109・A110に設置されたパネルの右上の番号に従い〉ご自身で、搬入・掲示および撤去・搬出願います。

搬入・掲示 5月31日(土) 9:00~12:00

撤去・搬出 6月1日(日) 15:30~17:00

※掲示が遅れた場合は、優秀ポスター発表賞の審査対象外となる場合があります。

※ポスターは、指定時間まで掲示しておいてください。

※指定時間外に撤去される方は、受付・担当者に申し出てください。

※大会終了時に撤去されていないポスターは学会側で処分いたします。

ポスター発表日時・要領

- 日時・会場：

ポスターセッション①：2025年5月31日(土) 13:00~14:00

(教育研究棟 A109、A110)

ポスターセッション②：2025年6月1日(日) 9:00~10:00

(教育研究棟 A109、A110)

ポスター発表者は、セッション① — 12:55までに、セッション② — 8:55までに、発表場所にお集まりください。

ポスター発表は、1演題あたり質疑を含めて5分(発表3分強+残り2分弱)で、最後に座長のコメント(討議の場合もあり)があります。セッションによって多少異なる場合がありますので、座長の指示に従い、時間を厳守ください。発表時間などの管理は時間係が行います。

ポスターの発表は2~3グループが同時に行います。

※抄録集は発表順でなく、カテゴリー順に掲載しています。

優秀ポスター発表賞

今年度は、各セッションの座長の推薦により、優れたポスター発表者に『優秀ポスター発表賞』を授与します。

6月1日(日) 13:05より受賞者の発表と表彰式をA101で行いますので、ご参集ください。

指定口頭発表

6月1日(日) 12:00~13:10

[会場] 教育研究棟 A101

こども環境学会 2025年大会(高知) 指定口頭発表参加要領

指定口頭発表は、ポスター応募者のうち口頭発表を希望された方のなかから、抄録にもとづき、大会テーマ「こどもにやさしいまち・社会を目指して」に即した適切な内容を大会実行委員会ポスターセッション・ワーキンググループで選定しました。

指定口頭発表・発表要領

- **日時・会場**：2025年6月1日(日) 12:00～13:00 (教育研究棟 A101)
 - ・12時00分より指定口頭発表を行います。
 - ・発表者は、当該セッションの開始5分前(11時55分)に、発表場所にお集まりください。
 - ・指定口頭発表は、1演題あたり6分程度で5人の方の発表後、ディスカッションを行います。
 - ・司会者及びタイムキーパーの指示に従って時間厳守でお願いします。
- **テーマ**：「インクルーシブなこども環境ーこどもの自由は土佐の山間よりー」
- **司会者**：谷本 都栄 (帝京大学 准教授)
- **発表者**
 - ・浅野 由子 (日本女子大学 家政学部 児童学科・准教授)、和田上 貴昭、木村 久美子、森下 舞子：スウェーデンにおける外国籍の子どもと保護者の支援ー就学前施設間の連携を中心にー
 - ・仲村 あかり (山口大学教育学研究科・M2)、須藤邦彦：特別支援学校小学部に在籍する児童に対する適応的な行動の形成
 - ・長嶋 龍斗 (兵庫県立大学大学院緑環境景観マネジメント研究科・2024年度修了生)、嶽山 洋志：不登校児の居場所となるプレーパークのあり方について
 - ・榊 愛 (摂南大学理工学部 住環境デザイン学科・准教授)、大前 勇翔、新井 千夏、高辻 彩香：小学生を対象としたAR防災まちあるきゲームの開発と効果検証～防災意識・知識の定着と災害ARに対する感情に着目して～
 - ・筋生田 和哉 (子ども若者の声を取り入れる社会システム研究会・事務局)、川崎 レナ、増田 悠菜、武田 光平、山下 蒼生、寺田 光成：「子ども若者の声を取り入れる社会システム研究会」の試み

ポスターセッション①：5月31日（土曜日）13：00～14：00（教育研究棟 A109、A110）

演題分類	演題番号	演 題	発 表 者
B 学び・教育 I 13：00～13：25	B-01	アスリートが実施した体育授業の生徒と先生の評価ならびに先生の期待	森谷路子
	B-02	「色」の活用は、児童の地域感をいかに高めるか：防災教育の視点から	照山龍治、木村典之、幸野洋子、山崎朱実、宮里耕太、塩月孝子、秋田喜代美
	B-03	蔵の町並みを生かしたまち学習の効果と課題	馬場たまき、浪岡こはる、高橋果実
	B-04	「環境美化教育優良校最優秀校」・「社会に開かれた教育実践奨励賞」同時受賞校の地域連携に関する分析	佐藤克彦
	B-05	地域資源を活用した幼保小連携に必要な要素 ～横浜市公立小学校への実態調査から～	尾上伸一、三輪律江
B 学び・教育 II 13：30～13：55	B-06	特別支援学校小学部に在籍する児童に対する適応的な行動の形成	仲村あかり、須藤邦彦
	B-07	学生の探求心の創発と子ども理解を深める領域「環境」の指導に関する一考察 ～種団子からの発芽と子ども一人ひとりの育ちの違いを繋げることに着目して～	舟生直美
	B-08	保護者から学校へのクレームの構造化の検討	鈴木邦明
	B-09	小児の都市ドライビングシミュレーター事故時の表情心理分析	古寺崇裕、小柴満美子
	B-10	幼児期の STEAM 教育としての「科学絵本」の活用可能性 ～保育者の絵本選択基準と理科の不得意意識の統計的分析～	千田隆弘、濱田知美、井上徳之
D 遊び環境 I 13：00～13：25	D-01	保育環境が幼児期の発達に与える影響と保育者のかかわり ～身近な自然環境と原風景を生かした保育～	増田実菜
	D-02	保育室での自由時間における 2 歳児のあそび行動に関する研究 ～行動モニタリングを通じて～	大谷由紀子、高木真人、榊 愛
	D-03	Natural Playground Inspiration ～ ルースパーツを用いた箱庭遊びブース活動の取り組み ～	鮫島良一、仙田 考、宮里耕太、中林 忍
	D-04	3 歳未満児における築山遊びの有用性について	菊池直樹
	D-05	屋内遊戯施設におけるこどもの遊び行為と空間特性の関係	田代翔馬、石松丈佳
D 遊び環境 II 13：30～13：55	D-06	園庭の遊び環境に対する保育者の意識に関する一考察 ～生きる力を育む「遊び」のワークショップにおける「遊びの参観アンケート」の評価より～	谷本都栄、藪田弘美、清水一巳、小澤紀美子、福島県こども未来局
	D-07	子どもの遊び環境におけるリスクをどのように防ぐか？ ～イギリスの冒険遊び場を事例に～	仙波大海
	D-08	不登校児の居場所となるプレーパークのあり方について	長嶋龍斗、嶽山洋志
	D-09	超高層マンション立地地区における子どもの遊びと環境因子の関係性 ～東京都中央区晴海地区を対象として～	佐々木杏佳、饗庭 伸
	D-10	戸田市の民間学童保育施設における「インクルーシブな居場所」の共創の試行	上田一樹、木村 旭、石原悠太
E まちづくり・ 防災 I 13：00～13：25	E-01	子ども分野で活動する特定非営利活動法人の経営状況に関する検討 ～冒険遊び場づくりを中心とした活動を行う認定特定非営利活動法人に着目して～	久米 隼、梶木典子
	E-02	子どもと直接的接触が起こる地域資源と中高生の子どものまなざしに関する研究 ～中学生の子どもに対するまなざしに着目して その 2～	榑木理宥、三輪律江
	E-03	教育文化施設と周辺街路空間における乳幼児親子の滞在場所整備に関する研究 ～せんだいメディアテークと周辺屋外における行動調査をもとに～	錦織真也、平井百香、石垣 文
	E-04	ひばりが丘と学園町をフィールドにした高校生向けプログラム ～まちのみかたらボ：エリアマネジメント就業体験 2024/2025～	伊藤輝征、伊藤泰彦
	E-05	「とさっ子タウン」若者スタッフの参加理由にみる無形資産からの分析	花輪由樹
E まちづくり・ 防災 II 13：30～13：55	E-06	都市公園のインクルーシブな遊び場づくりへの学校教育を通じた子どもの参画 と影響	寺田光成、木下 勇
	E-07	産前産後における子育て支援活用の現状と活用に至る要素に関する研究Ⅲ ～横浜市補助事業親と子のつどいの広場たんぼ利用者への調査から～	岩田直人、三輪律江
	E-08	小学生を対象とした AR 防災まちあるきゲームの開発と効果検証 ～防災意識・知識の定着と災害 AR に対する感情に着目して～	榊 愛、大前勇翔、新井千夏、高辻彩香
	E-09	「2024 年能登半島地震子どもアンケート」から考える災害後の子どもの意見 反映	安部芳絵、川上園子、田代光恵、山田心健、佐々木有紀、千葉奏美

ポスターセッション②：6月1日（日曜日）9：00～10：00（教育研究棟 A109、A110）

演題分類	演題番号	演 題	発 表 者
A 保育Ⅰ 9：00～9：30	A-01	学童保育施設における「遊び家具」の企画による子どもの過ごし方の変化 3つの学童保育での実践から	清水 肇
	A-02	これからの時代の保護者・地域参加型行事の可能性： 清心幼稚園の「清心フェスティバル」にみる「開き方」の変容	境愛一郎、栗原啓祥
	A-03	3歳未満児と保育者によるリスクアセスメントについての探索的研究： 発話に着目して	辻谷真知子
	A-04	国内の保育施設における登はん系遊具及び総合遊具の設置改修実態	根橋杏美
	A-05	インクルーシブ型保育園の整備および制度的変遷と運営課題に関するケース スタディ	諸我忠明
	A-06	保育所・学童保育複合施設における「見る」「離れる」行動からみた園児と学 童児童の育ち合い一日高どろんこ保育園・学童保育室の園庭交流の事例から一	三國隆子、佐藤将之
A 保育Ⅱ 9：30～10：00	A-07	1歳児における社会性発達を促進するお散歩活動の実践事例	岩崎良亮、照屋建太
	A-08	保育・教育教材としてのトランスパレントペーパーの効果について 一光と色に注目して一	馬場結子
	A-09	スウェーデンにおける外国籍の子どもと保護者の支援 一就学前施設間の連携を中心に一	浅野由子、和田上貴昭、木村久美子、 森下舞子
	A-10	五感を育む環境についての研究（3） 一園庭緑化の実践とその後の保育者による五感の記録から一	仙田 考、齊木 美紀子
	A-11	職員間コミュニケーションの向上に有効なソフト面・ハード面の施策の検討 ～微視的な会話場面の行動観察および職員室レイアウト変更の前後比較～	三輪 愛、佐藤 泰
	A-12	保育施設における園庭環境の改良をめぐる視点の違いと課題	清水一巳
B 遊び・教育Ⅲ 9：30～9：55	B-11	絵の具やインクを使わないねんど版画の検討 未就学児と特別支援学校小学部児童を対象とした実践を通して	本村佳奈子、屋宜久美子
	B-12	美術鑑賞による幼児の非認知能力の育成可能性 一大原美術館の取り組みに着目して一	佐藤晶子、寺元静香、宮本友弘
	B-13	公立小学校における学校博物館の実態・動向の把握に向けて	久保内加菜
	B-14	幼児の植樹体験に関わる樹木医との実践の一考察	村松良太、崎川 哲一
	B-15	身体重力空間制御トレーニングを介した社会教育システム開発における発話文 の感情推量技術	渡辺 望、佐藤史康、福地ひかり、 仲村あかり、須藤邦彦、三由野、綿谷孝司、 小柴満美子
C 子育て・ 子育て支援Ⅰ 9：00～9：25	C-01	子どもの「森のようちえん」での経験が保護者に与えた影響	原田美保、藤後悦子
	C-02	地域住民の課題解決を担う人材育成プログラムとその効果 一社会的子育てを目指した介入事例一	藤後悦子、崎浜星
	C-03	地方都市における質を担保した子育て支援活動と人的課題	小松陽子、藤枝俊之、長野敏秀
	C-04	大学の資源を活用した親子遊びイベントの評価と課題一地域の子育て環境とし ての可能性	旭 彩希、今村麻子
	C-05	地域での妊娠期からの切れ目ない支援に向けた「まち保育」視点からの育児講 座の提案一胎児期からの切れ目ない包括型まち保育システムのモデル構築に向 けてその5	三輪律江
C 子育て・ 子育て支援Ⅱ 9：30～9：55	C-06	横浜市の教育・就学前施設の施設外活動の調査からみる道遊びの可能性につい て一こどもの子育てに資する「ケア」としての道のあり方研究に向けて一	景山紘翔、尾上伸一、三輪律江
	C-07	地域全体から捉える子育て支援の実践に関する一考察	小屋美香
	C-08	重症心身障害児・者施設における温湿度・空気・光環境の長期調査 一北関東・東海地方の3施設を対象として一	青木 哲、今田太一郎
	C-09	子どもの意見表明権保障に関する質的研究 一子ども食堂の取組みに焦点を当てて一	多橋和輝
	C-10	児童館・児童センターにおける広場的な遊び空間の展開に関する考察	田川正毅、塚本未来、藤田大輔
D 遊び環境Ⅲ 9：00～9：30	D-11	自治体による子どもの外遊び推進事業に関する考察～神戸市を事例として～	梶木典子
	D-12	校庭環境と休み時間における子どもの外遊びの関連 一長野県東御市の全小学校を対象とした実態調査一	今井夏子、城所哲宏、堤 裕美、岡田真平、 山口千春
	D-13	学校敷地内にある学童保育の地域連携・交流の現状 一大阪府・京都府・滋賀県下における学校敷地内学童保育を対象としたアンケート調査から一	塚田由佳里
	D-14	公共的余暇施設における感覚に優しい利用ガイドブックの作成 第2報： 香美市立やなせたかし記念館アンパンマンミュージアムの取組を中心に	亀井楓乃、高橋秀俊、小松静香、大原伸騎、 大内雅子、柴田美嶺、野田あいみ、玉田志織、 木下晏里沙、松尾綾子、上野佳奈子
	D-15	先史時代における子ども用遺物の解釈一「遊び」を通じた生活訓練一	織田将徳
	D-16	霧囲気を構成する要素におけるこどもの遊びの捉え方に関する考察 一瑞浪市中山道大湫宿を対象として一	櫻木耕史、藤内湧月
F 非営利団体の 活動紹介 9：00～9：20	F-01	自然あそびを動機づける環境構成とあそびの展開	町田幸作、 特定非営利活動法人石狩たんぼ認定こども園
	F-02	「こども若者の声を取り入れる社会システム研究会」の試み	蒔生田和哉、川崎レナ、増田悠菜、武田光平、 山下蒼生、寺田光成、 こども若者の声を取り入れる社会システム研究会
	F-03	こどものための音環境デザイン 一社会的理解の拡充と現場と共に取り組む音環境づくりに向け一	野口紗生、船場ひさお、片岡寛子、 一般社団法人こどものための音環境デザイン
	F-04	病気があってもわくわくを！ ～小児慢性特定疾病児童等の自立に向けた取り組み～	西 朋子、榎垣高史、越智彩帆、 認定NPO法人ラ・ファミリエ

協賛企業広告

(こども環境学研究 Vol.21 No.1)

教育図書株式会社	一般社団法人住宅生産団体連合会
株式会社アネビー	太平洋学園高等学校
海辺の杜ホスピタル	株式会社丹青社
株式会社岡部	東京ブラインド工業株式会社
タカオ株式会社	日本総合住生活株式会社
株式会社環境デザイン研究所	日本体育施設株式会社
三昭紙業株式会社	ハヤシ商事株式会社
医療法人島崎健やか会 島崎クリニック	学校法人日吉学園

(以上、掲載順)

●ポスターセッションC参加企業

合同会社キョウイクデザイン

大建工業株式会社

帝人フロンティア株式会社

どろんこ会グループ

(社会福祉法人どろんこ会・株式会社ゴーエスト・株式会社日本福祉総合研究所)

どろんこ会グループ

(社会福祉法人どろんこ会・株式会社ゴーエスト・株式会社日本福祉総合研究所・
株式会社南魚沼生産組合・株式会社 Doronko Agri)

●その他の協賛

高知県臨床心理士会

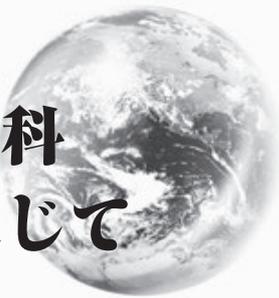
医療法人慈昭会 けら小児科アレルギー科

ふないキッズクリニック

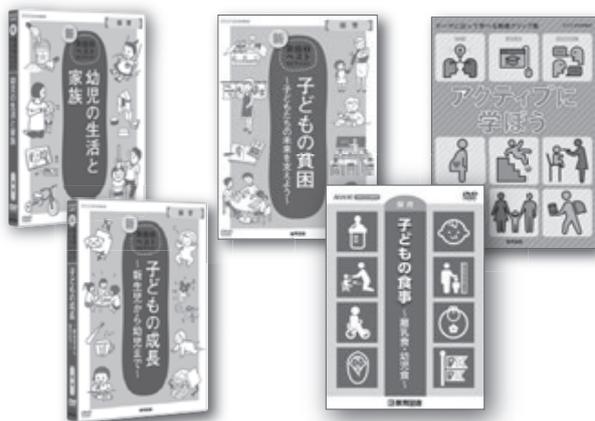


子どもたちの未来のために…

教育図書は
人生の必修教科
『家庭科』を通じて
保育環境に
貢献していきます!



▼保育関連 DVD 教材シリーズ



うまれるくん▲
(母性体験教材)

◀妊娠体験
教材セット



▶新生児
抱き人形



ゆうくん

あいちゃん

▼教科書
「保育基礎」



▶保育
マスターシール



家庭科を通して
ウェルビーイング
の実現に
貢献します!

人に、暮らしに、学びに、まっすぐ。

教育図書株式会社

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-3-2 TEL. 03-3233-9100 (代) FAX. 03-3233-9104
ホームページ URL <https://www.kyoiku-tosho.co.jp/>



Play for all 共に遊んで、共に学ぶ



アネビーがめざすインクルーシブな遊び環境

インクルーシブな遊び場は、障がいのある子、言語・国籍・宗教の異なる子、年齢や性別の違う子、大人や高齢者、そしてもちろん普通の子も対象です。誰もが認め合いながら、一緒に遊び、過ごせる場所です。同じ時間を楽しみながら、自然と共に過ごしていけるのです。

▲詳しくはアネビーのインクルーシブ特設サイトをご覧ください



回転遊具

コブラ



車いすのまま乗ることができるアクセスフリー遊具の新定番！回す役、乗る役の役割分担や会話が自然と生まれみんなで楽しい瞬間を共有できます。



コブラの紹介動画はこちら



株式会社

アネビー

www.aneby.co.jp

本社

〒151-0062 東京都渋谷区元代々木町33-8 元代々木サンサンビル 5F
TEL 03-3465-4828 / FAX 03-3465-7781

東京支社・横浜支社・大阪支社・福岡支社・広島営業所・札幌営業所



医療法人 精華園

海辺の杜^{もり} ホスピタル

理事長 町田 照代

院長 岡田 和史

- 精神科 ■心療内科
- うつの相談 ■認知症の相談 ■アルコール依存症の相談
- 精神科デイケア「わくわく」
- 重度認知症デイケア「ほのか」
- 訪問看護ステーション「うみべ」

〒781-0270 高知市長浜251番地
TEL(088)-841-2288 FAX(088)841-2280



遊びで育つ
遊び場創る



株式会社 岡部 遊具デザイン・設計・施工・点検・補修
<https://www.okabe-net.com/>

富山本社：富山市八人町6-2 空間クリエイティブ部 TEL.076-441-4561
東京支店：千代田区神田錦町1-17-4 錦町司ビル3F TEL.03-5281-1001



website



Instagram

遊ばれ続けて 70年

「ここに来るといつも楽しそうな顔してる。」
一時の表面的なものじゃない。
いつでも、いつまでも
つい楽しくなれる遊び。
そういう遊びをつくってる。

遊具・景観施設の総合メーカー
 **タカオ株式会社**
takao.co www.takao-world.co.jp

東京本社 / 東京都千代田区神田和泉町1-7-17KENタカオビル
福山本社 / 広島県福山市御幸町中津原1-787-1

第1HP



第2HP





株式会社

環境デザイン研究所

代表取締役 仙田 有

〒106-0032 東京都港区六本木5-12-22

TEL.03-5575-7171 FAX.03-5562-9928

http://www.ms-edi.co.jp



ゆづりのもり幼稚園

長期保存 5 年対応商品も取り扱っております。

介護・看護・防災・感染症対策商品を製造



三昭紙業株式会社

【ホームページ】



■本社 〒781-1111 高知県土佐市北地2424-7
TEL.088-854-0521 FAX.088-852-2170
E-mail honsha@sanshoshigyo.jp

■東京営業所 〒101-0046 東京都千代田区神田多町2丁目9番14
神田M.I.Cビル7階
TEL.03-6206-0506 FAX.03-6206-0685

長期保存
5年



一般外来(乳児健診・予防接種)と、こどもの発達障害・心身症の治療を行います



島崎クリニック小児科



診察時間	月	火	水	木	金	土	日
8:45~12:00	●	●	●	●	●	-	-
13:00~17:30	●	●	●	●	-	-	-

対象 初診は、中学生(15歳)まで **完全予約制**

初診の流れ *・*・*・*・*

▼問診記載→診察(本人、保護者)→身体検査、身体計測

▼後日 発達検査、心理検査等を実施

▼3週間~2か月後 結果説明、治療方針の提案



一般外来 乳児健診 予防接種

臨床心理士 公認心理師資格あり

言語聴覚士 常駐

作業療法士

育児支援にも力を入れています

お悩みのことがございましたら、
まずは一度お電話ください!

小児科 〒780-8010 高知市棧橋通2丁目12-5 ☎088-802-8710

第21回 家やまちの絵本コンクール

自分で、親子で、お友達と絵本をつくってみませんか?

後援：国土交通省、文部科学省、住宅金融支援機構、都市再生機構
北海道・福島県・茨城県・栃木県・群馬県・埼玉県・千葉県・東京都・神奈川県・新潟県・長野県・岐阜県
静岡県・愛知県・京都府・大阪府・兵庫県・広島県・山口県・香川県・福岡県・大分県・沖縄県 各教育委員会

■家やまちへの夢を絵本に描いてみませんか? ■家やまちに関心のある子どもや、子どもたちと大人の合作なども対象としています。■応募作品は希望者のみ返却致します。

- 募集テーマ 「家やまち」への思い、夢、あこがれの家、好きなまちなど
- 応募部門 A.子どもの部(小学生以下) B.中学生・高校生の部 C.大人の部(18歳以上) D.子どもと大人の合作の部(子ども:小学生以下、大人:18歳以上)
- 作品の条件 ※A部門:類による製本の手伝い(作品の綴じ等)は可 ※A-B-C部門:合作(2人以上の制作者)での応募も可 ※D部門:3名以上でも可
- 表彰内容 国土交通大臣賞(1作品:賞状と図書カード5万円) 文部科学大臣賞(2作品:賞状と図書カード5万円) 住宅金融支援機構理事長賞・都市再生機構理事長賞(各1作品:賞状と図書カード5万円) 住生活月間中央イベント実行委員会委員長賞(4作品:賞状と図書カード3万円) 審査委員特別賞(賞状と図書カード1万円) 入選作(各部門上位5作品以内:賞状と図書カード1万円) 住生活月間中央イベント実行委員会 ■共催 一般社団法人 住宅生産団体連合会
- 主催 「家やまちの絵本」事務局
- お問い合わせ 〒115-0043 東京都北区神谷1-20-8 神谷印刷株式会社 TEL:03-3912-2571 E-mail:ehon@judanren.or.jp

応募者全員にもれなくプレゼント!!

色鉛筆 和名12色セット

※合作の方は1作品5個まで サイズ(タテ:115mm×ヨコ:90mm)

受賞作品集をつくります!



第20回「家やまちの絵本」コンクール受賞作品集

応募期間 令和7年7月20日(日)~9月6日(土) 消印有効

詳しくは右記ホームページを ご覧下さい 住宅・すまいweb http://jutaku-sumai.jp/ 検索



太平洋学園高等学校
TAIHEIYO GAKUEN

君の可能性を**MAX**にしよう!!!!

〒780-0061 高知市栄田町1丁目3番8号
TEL.088-822-3584 FAX.088-822-3585
e-mail.taiheiyō@taiheiyō.ed.jp
http://www.taiheiyō.ed.jp/



太平洋学園高等学校は「昼間定時制課程」と「通信制課程」があり、自分のライフスタイルに合わせて学べる単位制の高等学校です。

Tanseisha

空間づくりのプロフェッショナル

株式会社 丹青社

〒108-8220 東京都港区港南1-2-70
品川シーズンテラス19F
TEL | 03-6455-8100(代表)
URL | www.tanseisha.co.jp

札幌・仙台・横浜・名古屋・京都・大阪・福岡・那覇



福井県こども家族館

事業主：福井県、デザイン・設計、制作・施工：丹青社、撮影：梶原敏英

こどもの音環境を改善する
吸音アコースティックカーテン®

音環境を整える
TOKYO BLINDS

東京ブラインド工業株式会社
〒108-0072 東京都港区白金3-9-15 東京ブラインド白金ビル
TEL:03-3443-7771 FAX:03-3443-7775
https://www.tokyo-blinds.co.jp



平成8年以来、当社の集合住宅に関する知識・技術を生かして「住まい」についての中学校の技術・家庭科の副読本を作成して配布しています。同時に、生徒の皆さんから読後感想文を募り、優秀作品を表彰しています。

JS 日本総合住生活 株式会社

〒101-0054 東京都千代田区神田錦町1-9
TEL 03-3294-3381 https://www.js-net.co.jp/





暑熱環境の緩和装置

フィールド冷却細霧システム



スポーツ・レクリエーション施設の総合建設・管理運営

NTS 日本体育施設

<https://www.ntssports.co.jp>



もう一步先のフィールドへ

本社 〒164-0003 東京都中野区東中野3-20-10
TEL.03-5337-2611 FAX.03-5337-2610

夢のある暮らし
笑顔あふれる暮らしを応援します



家庭紙の総合メーカー

ハヤシ商事株式会社

<https://www.tissue.co.jp>

〒781-1102 高知県土佐市高岡町乙 3192-4

TEL : 088-852-0535 ☎0120-84-0535



ハヤシ商事は品質にこだわり高知県の自社工場で生産した、安心・安全・高品質な商品をお届けいたします。



ハヤシ商事株式会社
公式アカウント
@hayashi_tissue

@HAYASHI_TISSUE



ハヤシ商事株式会社
公式オンラインショップ
はこちらから

もりのなかには、あそびがいっぱい。さあ、きみはなにをしてあそぶ？



学校法人日吉学園

森の小学校
とさ自由学校
吾川郡いの町勝賀瀬 4387
☎(088)897-0011

森のようちえん認定こども園
もみのき幼稚園・めだか園
高知市鳥越 40-15
☎(088)844-5180

こども環境学会 2025 年大会 (高知) 実行委員・大会委員

●大会委員会

大会委員長	仙田 満	こども環境学会代表理事、東京工業大学名誉教授
大会委員	小澤紀美子	こども環境学会顧問、東京学芸大学名誉教授
	當本ふさ子	こども環境学会事務局

●実行委員会

実行委員長	高橋 秀俊	高知大学 特任教授
副実行委員長	池 雅之	高知工科大学 教授
副実行委員長	上野佳奈子	明治大学 教授
副実行委員長	松本 智津	高知大学 准教授
副実行委員長	横山 卓	高知大学 教授
実行委員	大西 宏治	富山大学 教授
実行委員	大豆生田啓友	玉川大学 教授
実行委員	木多 彩子	高知工科大学 教授
実行委員	北方 美穂	社会福祉法人陽光福祉会評議員、出版社役員
実行委員	小松 静香	高知大学 特任助教
実行委員	仲 綾子	東洋大学 教授
実行委員	中川 千鶴	鉄道総合技術研究所 上席研究員
実行委員	野口 紗生	浜松学院大学 講師、こどものための音環境デザイン 理事
実行委員	藤枝 俊之	ふじえだファミリークリニック 院長
実行委員	三輪 律江	横浜市立大学 教授
実行委員	屋宜久美子	愛媛大学 講師
実行委員	藪田 弘美	美作大学 教授
実行委員	玉田 雅己	こども環境学会事務局 事務局長